

令和7年度

第47回東海北陸地区特別支援教育研究大会 岐阜大会

大会報告

開催日時 令和7年7月30日（水）・31日（木）

会 場 じゅうろくプラザ・ハートフルスクエアG・岐阜市文化センター

<目次>

1. 大会概要

2. 開会式

会長あいさつ	岐阜市立岐阜特別支援学校 校長	中村 美雪	
来賓祝辞	岐 阜 市 長	柴橋 正直	様
	（ 岐 阜 市 副 市 長	後藤 一郎	様 代読）
	岐阜県教育委員会義務教育総括監	青木 孝憲	様
オープニング	アンクルンによる演奏		

3. 全体会

「岐阜県の特別支援教育の現状と課題について」

岐阜県教育委員会 特別支援教育課

課長補佐兼係長 棚橋 耕次 様

4. 講演会

「異彩を、放て。」

株式会社ヘラルボニー

ウェルフェア事業部 責任者 神 紀子 様

5. 分科会まとめ

6. アンケートまとめ

7. あとがきにかえて



大会概要

1 大会主題

多様な人々となつながら、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成
～誰もが主体者として活躍できる場づくりと切れ目ない支援の充実～

2 趣 旨

将来の予測が困難な時代に、未来に向けて自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく人材を育てることや、多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上させることが求められている。これは障がいの有無にかかわらず全ての児童生徒に求められることである。

そこで、本大会では、大会の主題を「多様な人々となつながら、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成～誰もが主体者として活躍できる場づくりと切れ目ない支援の充実～」と設定した。子供たちに未来への夢や希望を大きく育む支援の充実を追求する中で、私たち教師が、就学前や卒業後の関係機関との連携、保護者や医療、福祉、行政等の関係機関との連携を一層強化し、児童生徒をより多面的に支えていくことについて今後の在り方を各県の皆様と研究協議を深め、子供たち一人一人が幸せや豊かさを感じる人生を歩むための特別支援教育の更なる発展・充実につながる大会をめざしている。

3 期 日 令和7年7月30日（水）・31日（木）

4 会 場	第1日目（全体会）	じゅうろくプラザ	
	第2日目（分科会）	じゅうろくプラザ	[第2・4・7分科会]
		岐阜市文化センター	[第1・5分科会]
		ハートフルスクエアG	[第3・6分科会]

5 参 加 者 東海北陸地区特別支援教育関係者

6 日 程

【第1日目（7月30日）】

8:30	11:00	12:00	12:20	13:00	13:20	14:00	14:30	14:45	15:45	16:00
	第2回役員 運営研究会		受付	オープニング	開会式	全体会	休憩	講演会	諸連絡	

【第2日目（7月31日）】

8:30	9:00	9:20	11:35
分科会打合せ	分科会		
受付			

オープニング 13:00～13:20

講師 Ardian Sumarwan 先生
(インドネシア教育大学 KABUMI 指導者)

鈴木 祥隆 先生

(岐阜大学教育学部特別支援教育講座 助教)
岐阜市立岐阜特別支援学校高等部の
生徒や会場の皆さんでアンクルンの
演奏をします。

7 全体会 岐阜県の特別支援教育の現状と課題

8 講演会 演題 「異彩を、放て。」

講師 株式会社ヘラルボニー ウェルフェア事業部責任者 神 紀子 様

9 分科会

分科会テーマ・協議内容・場所

	分科会	テーマ	協議内容	会場
1	支援体制 (地域・校内)	<ul style="list-style-type: none"> ・地域・学校間における連携や支援体制の在り方 ・校内における支援体制の在り方 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校間及び地域・関係機関との連携 ・特別支援教育コーディネーターの役割 ・校内支援体制の整備 	岐阜市 文化センター 2階 小劇場
2	教科学習	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かに生きる力を育む教科指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に学習に取り組むための授業の在り方 ・生活に結び付き、個の資質や能力を伸ばす効果的な指導の工夫 	じゅうろく プラザ 5階 中会議室1
3	生活	<ul style="list-style-type: none"> ・主体性を伸ばし自立した生活を目指す指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的に活動に取り組む指導の工夫 ・生活の基礎をつくり、生活を高める指導の工夫 	ハートフル スクエアG 2階 大研修室
4	作業・進路	<ul style="list-style-type: none"> ・社会参加と進路実現を目指した指導と支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的な進路選択のためのキャリア教育の在り方 ・地域資源を活用した作業学習の在り方 ・関係機関との連携の促進 	じゅうろく プラザ 5階 中会議室2
5	発達障害 (小学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の教育的ニーズに寄り添う支援の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫 ・学習支援とICT等を活用した教育環境整備の工夫 ・発達に応じた他機関との連携 	岐阜市文化 センター 3階 展示室
6	発達障害 (中学校)	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人の教育的ニーズに寄り添う支援の工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫 ・学習や進路選択の支援とICT等を活用した教育環境整備の工夫 ・発達に応じた他機関との連携 	ハートフル スクエアG 2階 研修室50 研修室30
7	交流及び 共同学習	<ul style="list-style-type: none"> ・共生社会に生きる力を育む交流及び共同学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな関わりを育む交流及び共同学習の在り方 ・ねらいを明確にし、組織的に行う交流及び共同学習の在り方 	じゅうろく プラザ 5階 小会議室1

大会会長 挨拶

岐阜市立岐阜特別支援学校 校長 中村 美雪

会場にお集りの東海北陸地区の皆様、ようこそ岐阜にお越しくださいました。心より歓迎申し上げます。また、本日は公務ご多用のなか、岐阜市副市長 後藤一郎 様、岐阜県教育委員会 義務教育総括監 青木孝憲 様、岐阜市教育長 水川 和彦 様はじめ、ご来賓の皆様にご臨席賜り、誠にありがとうございます。

本大会の主題は「多様な人々とつながり、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成」です。オープニングでは、インドネシアからお越しいただいたアルディアン先生のご指導のもと、インドネシアの楽器アングルン会場の皆様で演奏していただきました。テーマの通り、県や国を超えて、皆様の心がつながったような幸せな気持ちになりました。

近年、少子化にもかかわらず、特別支援学級、通級指導教室はもとより、特別支援学校、通常の学級において特別な支援を必要としている児童生徒も増加しています。今後、マイノリティとマジョリティという関係性や、分離か包摂かという二者択一的な考え方も変わっていくのでは、と期待しています。ただ、どんな社会になろうとも、子供たち一人一人があらまのその子らしさを発揮して、幸せな今と未来をつくり出せる力を育みたいと願っています。そのためには、教職員、家庭、地域、関係機関などがつながり合うことと、私たち教職員の資質・能力の向上は不可欠です。本大会が、そうした指導力の向上の一助となり、県を超えた新たな学びのネットワークとなれば幸いです。

さて、このホール隣の岐阜駅前広場には、金色に光る織田信長公の像があります。岐阜ゆかりの信長公について記した「信長公記」には岐阜と滋賀の県境の「山中」について書かれてたくだりがあります。信長公は、岐阜と京都を行き来するなかで幾度も見かけた一人の障がいがある方に対し、岐阜から用意した木綿の反物を十反渡します。さらに、十反を村人に渡し、これで民家近くにこの方の家を建て、定期的に食べ物を準備し支援してほしいと、信長公は村人に依頼をしたのです。彼は、障がいの有無に関わらず、支え合って暮らす地域社会をつくらうとしたのではないかと考えられます。今で言うなら、持続可能なインクルーシブ・コミュニティ・システムを目指していたのかもしれない。

最後に、日々の尊いご実践に基づかれた本大会での講演や分科会発表にお礼を申し上げるとともに、参加された皆様方にとって信長公記にも引けを取らない深い学びにつながることを願い、私の挨拶とさせていただきます。



来賓祝辞

岐阜市長 柴橋 正直 様(岐阜市副市長 後藤 一郎 様 代読)

本日、第47回 東海北陸地区特別支援教育研究大会 岐阜大会が 盛大に開催されますこと、心よりお慶び申し上げます。

また、ここ岐阜市を会場とし、多くの皆様にお集まりいただきましたことに、感謝申し上げます。



私は、市長就任以来、市政における不変の方針として、こどもファーストを掲げております。

子どもたちへの投資を最優先事項として考え、子どもたちの安心・安全を守ること、寄り添い自立を促すための教育を進めること、切れ目のない支援を行うこと、社会とのつながりやぬくもりを感じられる情報発信をすることなど、健やかに安心して生活するための教育施策を進めています。

昨年度、本市の岐阜特別支援学校の高等部の生徒たちが、作業学習で作った、クラフトバンドで編んだかごや、湯飲みやおちょこなどの陶器を、市長室まで届けてくれました。かごは、クラフトバンドの太さを変えたり、編み方を変えたりすることで形を丁寧に整えて作ってありました。陶器は口が当たるところにやすりをかけ、相手が使いやすいようにしていると話してくれました。どちらも使う人のことを考えて作っていることが伝わってきました。また、生徒たちは、自分たちのがんばり、そこから学んだことなどを、生き生きと力強く語り、とても頼もしく感じました。本大会の研究主題、「誰もが主体者として活躍できる場づくり」というキーワードが、彼らの姿と重なりました。

明日、二日目には分科会が開催され、様々なお立場の先生方から、創意工夫ある子どもたちを軸においた実践についての発表及び協議がされることでしょう。大いに語り、大いに学び合い、共に高め合う機会となることを願っております。

岐阜市におきましても、オール岐阜で、特別支援教育の推進に尽力していく所存でおります。

今年4月26日に、岐阜城のある金華山のふもとに、「現代版楽市楽座」をイメージした「岐阜城楽市」がオープンしました。「歴史と文化と教育」の街、「岐阜市」の魅力が凝集された新名所となっております。機会がありましたらぜひ、お越しいただくことを心よりお待ちしております。

最後に、特別支援教育研究大会のますますのご発展と、本日お集まりの皆様のご活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

令和 7年 7月30日 岐阜市長 柴橋 正直

来賓祝辞

岐阜県教育委員会 義務教育総括監 青木 孝憲 様

本日、第47回 東海北陸地区特別支援教育研究大会 岐阜大会 が、東海北陸各地より、多くの先生方のご参会を得て、こうして盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。先生方、大変暑い中、ようこそ岐阜へお越しくださいました。心より歓迎いたします。



現代は、「VUCA」の時代と言われています。少子化・高齢化、混迷の度を増す国際情勢、気候変動、自然災害の激甚化、デジタル技術の発展等が複合的に作用し、社会や経済の先行きに対する不確実性は高まっています。学校を取り巻く社会の変化も「激しい」という言葉に尽きます。加速度的に進展し続ける教育のデジタル化、これまでの価値観を大きく変える働き方改革や部活動の地域展開、想定をはるかに超える自然災害や事案の発生などなど、私たちが経験したことのない激しい変化が押し寄せてきています。

こうした変化に対応するための教員。この志願者の減少に伴う教員の不足も、これら諸課題の対応や解決を難しくしている大きな要因の一つとなっています。子供たちは、変化が止まらない激しい時代を生きることになりそうです。もちろん、私たちもその時代に、今、生きています。また、どの学校もその中に存在しています。

岐阜県では、障がいのある子供たちが地域社会の中で安心して学び、成長することができる環境を整えることを目的とした特別支援教育推進プラン「子どもかがやきプラン」を策定し、特別支援教育の充実に努め続けてきました。そのような中、ここ10年で、岐阜県でも児童生徒数が25,000人余り減少し、0.8倍となりました。一方で、特別支援学級在籍児童生徒数は2,800名あまり増え、1.9倍となりました。これに伴い、特別支援学級数は1.3倍となり、全学級数の2割弱を占めています。令和6年度にはおよそ6,000名程度が特別支援学級に在籍し、全児童生徒の4.3%を占めるまでになりました。

また、通級指導を受ける児童生徒は、2.6 倍に増え、令和 6 年度には 7500 名以上の児童生徒が活用しており、これは全児童生徒の約5%に当たります。これに伴い、通級指導教室数は 3.7 倍に増えました。こうした状況の中、岐阜県の大きな課題の一つは、特別支援教育に対して十分な知見と経験を有した教職員の確保や育成です。

小中学校教諭採用選考試験においては、特別支援学校普通免許所有者に対する加点制度や、特別支援学校への派遣制度、担当年数に応じた研修などを設け、特別支援学級在籍児童生徒や通級指導教室活用児童生徒によりよい教育や支援を届けようとしているところです。今年度からは、「今さら聞けない、あんなこと…」をキャッチフレーズに管理職対象のマネジメント研修も新たに開設しました。これらのことは、特別支援教育のみでなく、岐阜県の学校教育の質の向上に大きく寄与すると信じての取り組みです。すべての児童生徒への見方や支援、指導、接し方などが変容していくことを期待して取り組んでいるところです。

今回、東海北陸の各県から、特別支援教育に対する知見や経験が豊富な先生方がお集まりになっておられます。岐阜県以外の実践や取り組みを、しかも対面で直接交流できる。こんな素晴らしい機会があること、大変有難く思います。是非、児童生徒への教育や支援などのみならず、「本県、あるいは、本市町において、こんな研修があり、こういう点で大変有益であった」、「本県、あるいは本市においては、こんな目的のために、こんな取り組みを行い、有効だと感じている」等、研修や取り組みもご紹介いただきたいです。岐阜県としては、耳を傾け、大いに参考にさせていただきたいと思っています。

教育とは、地道で愚直な実践の積み重ねの上に成り立っていると思います。うまくいくこともあります、うまくいかないことも数多くあり、私は一人反省会を毎夜繰り広げてきました。常に考えていたのは、「いま目の前にいる子がどうしたら幸せになれるのか」でした。どんな子も幸せになるために生まれてきました。本大会が、またその一歩になればいいなと思っています。

障がいの有無に関わらず、誰もが互いの人格と個性を尊重し、理解し合い、支え合いながら共に生きていく社会の実現のために、本日お集まりの皆様が、健康で益々ご活躍いただくとともに、各県の特別支援教育研究会のより一層のご発展を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

オープニング(アンクルン演奏)

岐阜市立岐阜特別支援学校の演奏発表・会場参加者による全体演奏



インドネシア教育大学 KABUMI 指導者 Ardian Sumarwan 様
岐阜大学教育学部特別支援教育講座 助教 鈴木 祥隆 様



全体会

「岐阜県の特別支援教育の現状と課題」

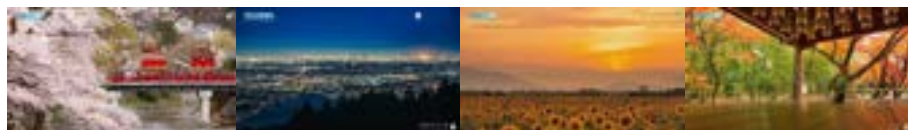
岐阜県教育委員会 特別支援教育課 教育支援係 課長補佐兼係長
棚橋 耕次 様



第47回 東海北陸地区特別支援教育研究大会 岐阜大会

岐阜県の特別支援教育の現状について

岐阜県教育委員会 特別支援教育課



第4次 岐阜県教育振興基本計画

[2024年度～2028年度]

施策IV
「学びの多様なニーズに応える環境」の充実

特別支援教育の推進

課題

- 多様なニーズに応じた学びを支える学習環境の整備
- 多様なニーズに応える学びの場の充実
- 学びの場を支える教員の専門性向上

岐阜県
[2024年2月]

第4次子どもかがやきプラン — 地域と共に創る 新たな学びのスタイル —



令和5年3月
岐阜県教育委員会

■4次子どもかがやきプラン アクションプラン 2025 地域と共に創る 新たな学びのスタイル

本計画は、令和5年度から令和7年度までの3年間で、岐阜県内の全ての子どもたちが、地域と共に学び、成長できるような環境を整えることを目的としています。

1. 教育の機会均等の実現

（1）障害のある子どもたちの学習環境の整備

（2）経済的困難を抱える子どもたちの学習支援

（3）学習意欲の向上と学習習慣の定着

2. 地域と連携した学習環境の整備

（1）学校と地域の連携による学習支援

（2）地域資源を活用した学習環境の整備

（3）地域住民の参画による学習環境の整備

3. 教育の質の向上と学習成果の向上

（1）教員の専門性の向上と学習成果の向上

（2）学習成果の向上と学習意欲の向上

（3）学習意欲の向上と学習習慣の定着

「岐阜県が進めるインクルーシブ教育システム」の構築

① 難いに寄り添う 専門性の高い学びの提供

② 学びを広げる 校種の枠を超えた学びの提供

③ 社会につなぐ 地域資源を活用した学びの提供

一人一人の教育的ニーズに応える新たな『学びのスタイル』

「学びの場」の整備

第4次岐阜県教育振興基本計画「特別支援教育の推進」のための3つの課題

政策Ⅰ
多様なニーズに応じた学びを支える学習環境の整備

① 学びを支える環境の整備
② 高等特別支援学校機能の整備
③ 特別支援学校児童生徒の通学支援

政策Ⅱ
多様なニーズに応える学びの場の充実

① 発達障がいのある児童生徒の学びの充実
② 視覚障がい・聴覚障がいのある児童生徒の学びの充実
③ ICTを活用した学びの充実
④ 社会へつなぐ職業教育・就労支援の充実
⑤ 医療的ケアを必要とする児童生徒の学びの充実
⑥ 交流及び共同学習の推進
⑦ 切れ目ない支援体制の整備

政策Ⅲ
学びの場を支える教員の専門性向上

① 研修の充実による教員の専門性向上
② コア・スキルの活用による教員の専門性向上



通級による指導を受けている児童生徒数（公立小・中学校）

（文部科学省：令和5年度通級による指導実施状況調査結果より）

都道府県名	小学校	中学校	合計
東京	27581	6415	33996
大阪	11867	3366	15233
愛知	8672	2170	10842
北海道	7912	1042	8954
神奈川	7046	1055	8101
千葉	7476	570	8046
岐阜	6368	1161	7529
埼玉	6585	932	7517
京都	5427	1672	7099
兵庫	5440	1574	7014

（政令指定都市の人数を含む）

岐阜県

令和5年度小中義務教育学校

全児童生徒数 151,932人

→約5%が通級を利用

通級による指導が十分な教育効果を上げるためには、特別支援教育に関する専門的な知識や技能を持った担当教師が、個々の児童生徒の障がいの状態や教育上必要な支援等を的確に把握し、それに応じた指導を行うことが求められます。

（文部科学省編著 障害に応じた通級による指導の手引 改訂第3版 より）

教員の専門性の向上

研修の充実による教員の専門性向上

「学びの場を支える教員の専門性向上」

・特別支援学級新任担当教員研修（年間3回）

R4	R5	R6	R7
265人	243人	261人	271人

※岐阜市を除く

- 教育課程の編成について（自立活動・教科等を合わせた指導とは）
- 個別の教育支援計画・指導計画の作成と活用
- 交流及び共同学習の進め方
- 学級経営・授業づくりについて など

・新任特別支援教育コーディネーター研修（年間2回）

R4	R5	R6	R7
248人	232人	223人	220人

※岐阜市を除く

- 特別支援教育コーディネーターの役割と校内委員会の推進
- 個別の教育支援計画の作成と引き継ぎ
- 校内支援体制の構築
- 地域や関係機関等との連携 など

発達障がい支援担当教員養成事業

「学びの場を支える教員の専門性向上」

① <知る研修> スタンダード研修（希望制）

- 多くの動画から関心のある講話を選んで視聴する（オンデマンド）

② <知る研修> ベーシック研修（希望制）

- 多くの動画から関心のある講話を選んで視聴する（オンデマンド）
- コアティーチャーによる通級指導教室の授業を参観する

③ <自立する研修> スタート研修（発達障がい通級指導教室担当1年目 悉皆）

- コアティーチャーによる通級指導教室の授業を参観する
- コアティーチャーに学校に来てもらい、相談したり、助言をもらったりする

④ <学び合う研修> ステップアップ研修（発達障がい通級指導教室担当2年目以降 希望制）

- 園域受講者の小グループごとに課題追究形式で話し合う
- コアティーチャーによる通級指導教室の授業を参観したり、助言をもらったりする

⑤ <学び合う研修> レベルアップ研修（特別支援教室担任 言語通級指導教室担当2～5年目 希望制）

- 園域受講者の小グループごとに課題追究形式で話し合う
- 特別支援教育課が個別にサポートする

⑥ <学び合う研修> マネジメント研修（管理職 希望制）

- 講義や動画をを通して、特別支援教育についての理解を深める
- 校内体制のマネジメントの仕方について学ぶ

「今さら聞けない、あんなこと…」

<自立する研修> スタート研修

（発達障がい通級指導教室担当1年目 悉皆）

「学びの場を支える教員の専門性向上」

初めて担当者になり…

- 教室づくりや授業づくりが不安
- 個別の指導計画や授業計画の書き方が分からない
- 困ったときに相談できる人がほしい



疑問や不安の解消へ



コア・ティーチャーの授業が参観できる
コア・ティーチャーに学校に来てもらって相談したり、助言をもらったりできる。



初めての通級担当、何から手を付けていいのかわからず困っていましたが、具体的なアイデアを教えていただけて、次回の指導からすぐに取り入れることができました。

分からないところを電話でも相談しました。親身に答えていただけてすごく安心できましたし、通級担当者の気持ちも共有できて、つながりも感じました。



＜学び合う研修＞ ステップアップ研修 レベルアップ研修 (特別支援学級担任・発達障がい通級指導教室担当・言語通級指導教室担当 希望制)

- 圏域受講者の小グループごとに課題追究形式で話し合う
- コア・ティーチャー、県教委特別支援教育課が個別にサポート

＜学び合う研修＞ マネジメント研修 (管理職 希望制)

- 講義や動画を通して、特別支援教育についての理解を深める
「今さら聞けない あんなこと…」
- 校内体制のマネジメントの仕方について学ぶ

インクルーシブ教育を推進したいと思うのだが、どのような手立てから始めればいいのか、何か手立てはないのか。

就学先の決定について、保護者の理解を得るために、どのように提案すればよいのか。

特別支援学級在籍児童生徒の将来を見据えた進路選択について、保護者にどう伝えていけたらよいのか。

校内委員会を開く際に、管理職は何をこそ大切にしなければならぬのか。



高等学校における通級による指導

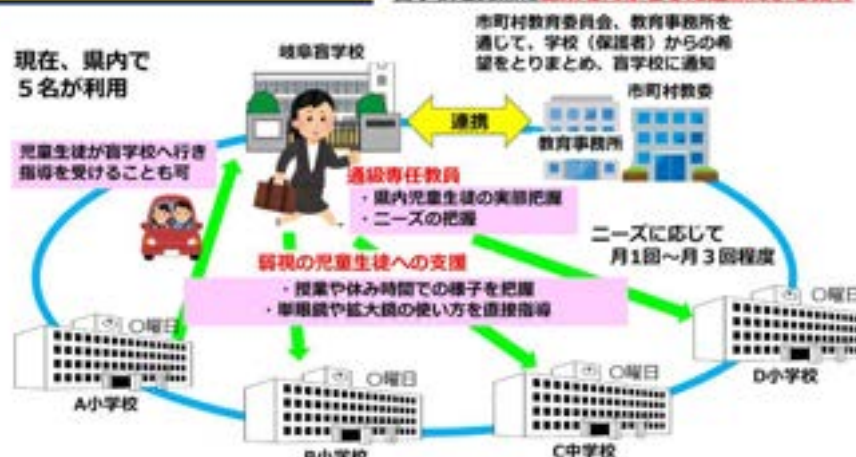
■通級による指導の種類

- ・ 自校型：在籍する学校で実施（授業内で実施）
- ・ 他校型：主に在籍する学校以外で受講（現在は日曜日に実施）
- ・ 巡回型：各地域の拠点校通級専任教員が地域内の高等学校を巡回し、在籍する学校で受講（主に放課後に実施）



視覚障がい児童生徒支援事業

盲学校を拠点に全県を対象とした通級による指導



ご静聴ありがとうございました

講演会「異彩を、放て。」

株式会社ハラルボニー ウェルフェア事業部 責任者 神 紀子 様

▼講師プロフィール



2009年に株式会社リクルートに入社し、新規事業推進に携わる。2017年に株式会社グロービスへ転職し、人材・教育領域で経験を積むと同時に、グロービス経営大学院にて MBA を取得。30歳の時にフィリピン留学と世界一周を経験し、社会の不平等や自身のアンコンシャスバイアスに直面したことをきっかけに、ソーシャルビジネスの道を志し、2023年ハラルボニーのミッションに共感し、ウェルフェア事業部の立ち上げ責任者として参画。2024年に筑波大学インクルーシブリーダーズカレッジを修了。企業や自治体と連携しながら DIVERSESSION PROGRAM を通じて、共生社会の実現に取り組む。



分科会担当者一覧表(敬称略)

	地域	提案者	司会者	助言者	記録者
1	浜松市	浜松市立笠井小学校 教諭 永田 豪	浜松市立水窪小学校 教諭 小栗 志介	浜松市教育委員会 教育センター 指導主事 中村 啓太郎	飛騨市立神岡小学校 教諭 宮嶋 康代
	岐阜県	飛騨市立古川中学校 教諭 澤上 大貴	飛騨市立神岡中学校 教諭 岩 優子	高山市立新宮小学校 校長 脇田 裕子	飛騨市立古川西小学校 教諭 小野 千里
2	三重県	度会町立度会小学校 教諭 出口 美春	玉城町立田丸小学校 教諭 出口 智規	三重県教育委員会 特別支援教育課 充指導主事 中澤 賢二	笠松町立笠松中学校 教諭 松本 和志
	岐阜県	各務原市立那加第一小学校 教諭 高木 史子 教諭 加藤 浩行	各務原市立川島小学校 教頭 福田 大治	岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 豊吉 章孝	本巣市立真桑小学校 教諭 豊吉 綾香
3	愛知県	岡崎市立矢作南小学校 教諭 空中 健一	岡崎市立甲山中学校 教諭 博多 圭子	岡崎市立山中小学校 教頭 鈴木 巨裕	関市立金竜小学校 教諭 太田 尚子
	岐阜県	関市立下有知小学校 教諭 横山 侑也	郡上市立川合小学校 教頭 桑田 香織	岐阜県教育委員会 岐阜教育事務所 教育支援課 充課長補佐 洞口 美樹	関市立桜ヶ丘小学校 教諭 永田 ひかる
4	福井県	福井県立福井南特別支援学校 教諭 揚原 みさと	鯖江市惜陰小学校 教諭 宮本 あす葉	福井県教育庁 高校教育課 主任 池田 和義	大垣市立安井小学校 教諭 大藏 勤子
	岐阜県	垂井町立不破中学校 教諭 小山 直美	垂井町立東小学校 教諭 中村 薫	岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 辻 香子	海津市立石津小学校 教諭 山元 綾子
5	富山県	富山市立蟠川小学校 教諭 深山 大輔	富山市立杉原小学校 教諭 高地 松美	富山市立藤ノ木小学校 教頭 小櫻 昌子	可児市・御嵩町中学校組合立共和中学校 教諭 今瀬 咲恵
	岐阜県	美濃加茂市立山手小学校 教諭 佐合 みさき 美濃加茂市立古井小学校 講師 廣江 めぐみ	御嵩町立御嵩小学校 教諭 名倉 さおり	岐阜県教育委員会 特別支援教育課 課長補佐 林 幸代	美濃加茂市立太田小学校 教諭 吉村 一輝
6	名古屋市	名古屋市立植田小学校 教諭 原 暁良	名古屋市立西特別支援学校 主幹教諭 太田 栄三郎	名古屋市立西特別支援学校 校長 森 浩隆	岐阜市立加納小学校 教諭 河上 弘恵
	岐阜県	岐阜市立草潤中学校 指導教諭 澤田 美由紀	岐阜市立草潤中学校 教諭 栗本 ゆかり	岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 神山 典子	岐阜大学教育学部附属小中学校 教諭 土生 雄一
7	石川県	金沢市立中央小学校 芳斎分校 教諭 浅田 賢宏	金沢市立戸板小学校 教諭 大井山 恵	石川県教育委員会事務局 学校指導課 主任指導主事 松本 学	多治見市立小泉中学校 教諭 岡 英樹
	岐阜県	恵那市立大井第二小学校 教諭 中村 美香	恵那市立大井小学校 教頭 高森 恵	岐阜県教育委員会 特別支援教育課 課長補佐 高橋 雄一	恵那市立大井小学校 教諭 大島 永美乃

提案①

静岡県 浜松市立笠井小学校 教諭 永田 豪

「切れ目のない支援体制の構築を目指して～横の繋がり・縦の繋がりを通して～」

(1)横の繋がり(校内支援体制の強化)

校内における通常学級と発達支援学級のつながりを「横の繋がり」と定義し、教員・児童双方へのアプローチを通じて、インクルーシブな環境を構築する取組を実施。教員間の専門性向上と児童間の相互理解を深めることができた。

(2)縦の繋がり(小中学校区の連携)

小学校と中学校の学校間連携を「縦の繋がり」と定義し、中学校区全体で子供を支える体制を構築する取組を実施。発達支援コーディネーター間の連携を核とし、進学時の円滑な移行と、長期的な見通しをもった支援をすることができるようになった。

<成果と課題>

- ・インクルーシブ教育の授業を発達支援学級の担任が通常学級児童へ実施したことで、発達支援学級の児童が抱える困難さへの共感と理解を教員・児童双方に促すことができた。
- ・支援体制を持続的に構築していくためには、人や環境が変わっても長く続けていくための取組が必要である。

研究討議

研究協議の視点(学校間および地域・関係機関との連携)

(特別支援教育コーディネーターの役割)

(校内支援体制の整備)

- ・特別支援教育コーディネーターの連絡会は、教員の専門性向上や孤立感の解消、モチベーション向上に貢献している。地域や学校ごとに規模や方法が異なるが、まずは誰かが率先して動き出すことが必要である。
- ・今後の課題は、人事異動があっても継続できるようなシステム化(年間計画の作成等)と、地域や学校間の取組の差をなくすことである。周りを巻き込んで取組を広げていけるとよい。
- ・通級指導教室について、担当者からの発信(授業公開等)で理解を求めるだけでなく、特別支援コーディネーターと連携し、より多くの教員へ広げていけるとよい。

助言者指導

静岡県 浜松市教育委員会 教育センター 指導主事 中村 啓太郎

- ・学校の教職員全員で行う事例検討会は、学校体制で行う自立活動の指導目標や指導内容の設定を行う場になっている。そのため、通常学級の担任にとっては、自立活動について理解する機会になり、次年度に向けての継続的な指導が可能になっていくところがよい。
- ・通常の学級の児童へのアプローチによりさまざまなサポートを理解するということは、発達支援学級や通常学級の区別なく、自分自身の特性を知り、試行錯誤しながら自立的に学ぶ姿につながっていく。
- ・すべての教職員が特別支援教育に携わるということは、障がいの有無にかかわらず、すべての子供のよさを引き出すという教育全体の質の向上に寄与している。
- ・浜松市の実践は、特別支援教育に携わる教職員のモチベーションを向上させることにつながっている。多くの教師を長期的視野に立って計画的に育成配置することにもつながっており、非常に価値のある実践である。

提案②**岐阜県 飛騨市立古川中学校 教諭 澤上 大貴****「生徒のひとりだちを支援する切れ目のない支援体制の構築****～学校と地域をつなぐ飛騨市の実践～」****(1)地域支援体制**

- ・12年間通して児童生徒支援員が観察訪問、市内クリニックに児童精神科医2名常駐、発達精神科医による10代健診、療育を専門とする NPO 法人、学校作業療法室を月2回実施、飛騨市地域生活安心支援センター「ふらっと」等、協力機関が多い。そのことから、生徒の見立てから支援方針の共有・保護者との懇談が迅速に行える。
- ・保育園年中児対象の説明会、小学校コーディネーターの保育園参観、希望者への就学相談会、特別支援教育コーディネーター会での情報共有、高等学校の先生方を招いての勉強会、中高連携意見交流会等を行うことで、卒園・卒業後も支援が継続され、校種を問わず、地域全体へ支援が広がった。

(2)校内支援体制

- ・教職員の専門性が高まれば、どの教員から見通しをもった支援が受けられる。コーディネーターが支援の必要性や合理的配慮の具体等について通信を書き、職員会や研修などで知識と共通理解を図り、一貫した支援につなげている。
- ・作業療法士による支援の研修・通級参観を行い、自立活動への理解や通常学級での支援につなげている。
- ・児童生徒が自分の得意・不得意を客観的に捉えて自己理解を促進するために、作業療法士と担任が連携して「自分研究」を行っている。自分の特性を知り、より本質的な自分の課題に目を向けることで、自ら助けを求められるようになったなどの姿が見られた。
- ・コーディネーターは、説明会を保護者や本人に向けて実施したり、必要に応じて懇談に同席したりするなど、すぐに相談できる関係性を結び、特性に合った就学先決定につなげている。

〈成果と課題〉

- ・地域連携から、教職員全体で就労までを見通した支援をする必要性が見えた。また、どの発達段階であっても、自己の特性の理解と自己受容を進めることや、見通しをもった学習の場の選択の必要性があるという課題が見えた。
- ・地域連携から見えた課題を見直して校内の一貫した支援を行い、適切な就学先・進路選択に向けて支援することができた。
- ・特別支援教育コーディネーターが代わると連携が途切れる可能性もある。中高連携意見交流会等は、市の教育研究会と連携して、担当が代わっても毎年取り組めるようにシステム化していく。
- ・個別の支援を受けられないまま卒業していく児童生徒がいる。全職員による一次支援の充実だけではなく、困り感を表出できる児童生徒の育成が必要である。

研究討議**研究協議の視点(学校間および地域・関係機関との連携)****(特別支援教育コーディネーターの役割)****(校内支援体制の整備)**

- ・市内各学校の規模が違い、連携の難しさを感じる。どこかで誰かが音頭をとり、スタートしていくことが大事だと思う。小さい市町村は互いに顔見知りになりやすいが、大きい規模のところは難しい。行政の理解も必要である。
- ・通級で行っている支援を担当や管理職に知ってもらうことが難しい。自分から発信していくために、コーディネーターに場を設定してもらい、支援を公開する場をもつことが大事である。
- ・コーディネーターは、校内で行われている通級等の支援を、担任が空いている時間に見学するなど、教職員に知ってもらう機会をつくるとよい。
- ・学校作業療法士と行っている「自分研究」は、自立活動で行っている。「自分研究」は、生徒の特性によって内容が違ふ。通常学級では、困っている児童生徒に声をかけ、「相談」や「観察」を行っている。自己理解を深める手立てとして、「自分研究」を進めるとよい。

助言者指導

岐阜県 高山市立新宮小学校 校長 脇田 裕子

- ・飛騨市の子供の発達支援・障がい児支援体制の要になっているのが、地域生活安心支援センター「ふらっと」である。また、児童精神科医・小児科医・作業療法士・学校心理士等、行政や福祉の多様な関係機関が結び付いている。学校は、それらの強力な関係機関と積極的・専門的・建設的に連携を行っているところがとても参考になった。
- ・「特別支援教育コーディネーター会」では、飛騨市のコーディネーター全員が、飛騨市中の児童生徒を見ていくために、学び合い、力を付けていくことで、どの学校も同様にコーディネートしていくようにしている。互いの専門性を生かし、子供を真ん中に置いて、議論し、策を講じていくことが大切であると感じた。
- ・関係機関から得た情報や生徒の実態から、生徒の「ひとりだち」のための課題を見出し、付けたい力を明確にし、活動をコーディネートしている実践が素晴らしい。また、「子供の困り感を見つける。関係機関と積極的にアクセスし支援をつなぐ。学校全体の支援体制をつくる。教職員や保護者と、共に考え支援する。」といった特別支援教育コーディネーターの専門性を発揮しているところも参考になった。
- ・関係機関をどれだけ知っていて、どのようにつなげるのか。学校課題は何で、管理職や職員を巻き込んで、具体的にどのように取り組むか。そして、多様な関係機関とつなげ、支援を機能させていくことは、特別支援教育コーディネーターの役割である。ぜひ、それぞれの市町村や学校の強みを生かして取り組んでいきたい。



提案①

三重県 度会郡度会町立度会小学校 教諭 出口 美春

「一人一人の実態に応じた学習の工夫

～みんなが元気に楽しく学校で過ごすことができるように～」

(1)自立活動、生活単元学習

- ・児童の実態に応じて教材教具を工夫し、タイミングを見極めてスモールステップで指導することにより、児童のできることを増やし自信をもって生活する姿につながった。

(2)教科の学習

- ・普段の生活や行事の内容と、教科学習を関連させることによって児童が意欲的に取り組み、学んだことを表出することができ、自己肯定感を高めることができた。

<成果と課題>

- ・児童の発達段階や心情を考慮して学習活動を仕組むことで、主体的に取り組む力を伸ばす姿が生まれた。うまくいかない場合もあるので、PDCAのサイクルを遂行し指導を改善していきたい。

研究討議

研究協議の視点(主体的に学習に取り組むための授業の在り方)

(生活に結び付き、個の資質や能力を伸ばす効果的な指導の工夫)

- ・主体的に学習に取り組むために、小学校であれば 45 分間、中学校であれば 50 分間の授業の中でめりはりをつけることが大切である。1単位時間緊張の連続を持続することは難しい。適切に緊張と緩和を繰り返すことで集中力を持続させ、伸ばしていくことが大切である。
- ・生活に結び付いた単元の工夫をすることで、児童は意欲的によさを発揮し自分の力を伸ばしていける。また、単元の進め方、単位時間の進め方を同一にし、内容を変化・発展させることで、児童は見通しをもち、主体的に学習に取り組む、自分の力を伸ばすことができる。
- ・児童の学習の進捗状況を、年度替わりに適切に引き継いでいくことが大切である。どの教科がどこまで進捗しているのかポートフォリオやデータで引き継いでいくことが効果的である。一方、できていない内容をできるまでいつまでも繰り返し取り組むことで、児童が意欲的に取り組めない場合がある。教科書の内容を参考にしながら、苦手な部分はありつつも少しずつ進めていくことが、児童の意欲や学力を高めることにつながることもある。
- ・教科の学習は、児童の進路につながっている。近年は、特別支援学級(知的障害学級)に在籍する中学生の進路で、高校卒業の資格を有する専修学校に進学する生徒も増えてきた。進路についての情報提供を小学生のうちから、保護者に伝えていくことが大切である。

助言者指導

三重県教育委員会 特別支援教育課 充指導主事 中澤 賢二

- ・児童の実態は、多様化・重度化・複合化している。個々の実態をしっかりと把握して、指導に臨むことが大切である。実践でうまくいった場合は、実態の把握がしっかりとできている。4月から新しくスタートする場合、時間はないが、特別支援を担当する場合は留意してほしい。
- ・児童には、見えにくさや聞こえにくさ、肢体の不自由さや個性的な物事の捉え方など、さまざまな生活上の困難がある。指導にあたっては、そのような児童の実態把握をもとに、該当児童に合った教材教具や学習内容を適切に準備することが大切である。また、指導を進めていくうえで、児童や保護者の信頼を得ながらスモールステップで進め、児童が腹落ちするまで指導者が待つ心構えが重要である。本実践では、その心構えができていたのがよかった。
- ・本実践の中で、児童が評価の尺度は一つではないのに気付けたことがよかった。自分のできない部分もあるなかで、長所やできたことに着目することで自分の課題を乗り越えていこうとする児童の姿が生まれた。指導者の視点が児童の視点となり、成長を促している。

提案②

岐阜県 各務原市立那加第一小学校 教諭 高木 史子 教諭 加藤 浩行

「できた・わかった・使える」と言える子の育成

数学的に考える資質・能力の育成を目指して ～豊かに生きる力を育む教科指導～

(1)焦点化した課題

- ・導入時に、具体物の提示や操作を位置付けたり、既習事項を確認したりして問題場面を捉えやすくしたことで、課題を焦点化し、児童が見通しをもって学習を進める姿につながった。

(2)数学的に表現し、伝え合う活動の設定

- ・知的学級では、位取り表を用いた手順の説明や教師への解法の説明などの言語活動を仕組むことで、数の捉え方や計算の手順を筋道立てて考えられるようにした。
- ・自情学級では、自分の考えを視覚化して伝えるための指導を工夫することで、児童同士が考えを順序立てて伝え合う姿につながった。

(3)授業終末の工夫改善

- ・「模擬買い物」など、児童が楽しみながら繰り返し取り組める練習問題を設定したことで、意欲的に取り組む姿が見られた。

<成果と課題>

- ・個に合った学習課題や器具の使用は、数学的な資質・能力を育むことに効果的であった。
- ・学習の進め方や説明の仕方をパターン化することで、児童が自信をもって話す姿や、見通しをもって取り組む姿につながった。
- ・計算領域以外の内容も生活単元学習に関連付けていきたい。

研究討議

研究協議の視点(主体的に学習に取り組むための授業の在り方)

(生活に結び付き、個の資質や能力を伸ばす効果的な指導の工夫)

- ・タブレットなどICTをさらに効果的に活用したい。
- ・教育活動全体を通して、子供の自己選択・自己決定の場면을意図的につくっていききたい。
- ・複数学年で構成することが多い特別支援学級のよさを生かし、教科学習でも異学年の関わりを通して考え広げたり深めたりできるような指導形態の工夫も考えられる。
- ・児童の主体的な学びのためには実態把握が大切である。切れ目のない支援の充実のために、個別的教育支援計画や個別の指導計画を活用し、確実に記録を残しながら丁寧に引継ぎを行っていききたい。
- ・子供たちが将来自立して社会の中で生きていくことを見据え、一人一人の目標を明確に設定・共有しながら見通しをもって指導していきたい。教職員や保護者、関係諸機関と連携を図り、進路選択に関わる支援も小学校低学年の段階から長期的な視野で継続的に行っていく必要がある。

助言者指導

岐阜県 岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 豊吉 章孝

- ・知的学級では、学んだことを実践の場面に生かし、「できた」を実感できる単元構成になっていた。単元の終末を見通して、個に応じた課題を設定し、意欲的に、また繰り返し取り組むことができる学習活動にしたことで、学んだことを生かして単元末の活動を行う姿につながっていた。より実践的に生活単元学習を結び付けることで、実際の生活場面で学んだことを発揮する姿につなげていきたい。また、ICT 機器も効果的に活用していくとよい。
- ・自情学級では、学習指導方法の改善を図ることで、不安から心を乱す時間が減り、安心して学習に取り組む姿につながっていた。また、児童の困難さを把握し、教科の中で自立活動の指導を参考にした配慮や手立てを講じたことで、仲間の前で話す不安が軽減し、自分の言葉で話そうとする姿が増えていった。
- ・今後は、生活の中の課題に取り組む生活単元学習と、教科学習との関連を図り、体験的に学ぶことで 実際の生活場面に生かすことができるように指導を工夫改善していきたい。
- ・担任と支援員、教科担任、交流学級担任等との連携を深め、情報共有や環境調整を積極的に行っていくとよい。児童生徒の好きなものや強味を生かして学習活動を組み立てたい。

提案①

愛知県 岡崎市立矢作南小学校 教諭 空中 健一

「自分の思いを伝え、苦手なことにも諦めずに取り組む児童の育成

～ボードゲームを利用した、自立活動の実践～」

- (1)年間を通してボードゲームを取り入れる
児童の興味のあるゲームを取り入れたことで、主体的に取り組むことができた。
- (2)児童の特性や課題に応じて、ルール、扱う内容を変更や限定する
対話場面をつくるようにルールを変更。相手に質問をしたり、自分の意思をボードに書いて伝えたりするようになった。
- (3)児童が課題を改善・克服できるようにファシリテートする
互いが声をかけやすい座席、電子黒板に提示された情報をメモして整理など、児童の課題改善に向けた支援の工夫をすることができた。

＜成果と課題＞

- ・自立活動のなかで人と関わる活動が増えるにつれ、日常生活や授業のなかでも仲間と関わりが増えたり、最後まで課題に向き合おうとしたりするなどの変容が見られた。
- ・児童の目標に合わせた活動になるように、言葉かけやルール設定などのファシリテートの在り方をさらに工夫したい。

研究討議

研究協議の視点(主体的に活動に取り組む指導の工夫)

(生活の基盤をつくり、生活を高める指導の工夫)

- ・自立活動は、活動内容が同じでも、目標は一人一人違う。自立活動で培った力が授業の中で生かされ、社会でよりよく生きる力になる。「こんな自分になりたい」という目指す姿を共有して活動を行い、「こんな自分になったよ」と自覚できるような指導をしたい。
- ・自己肯定感を下げずに、自分の特性を自己理解・自己認識していくことが大事である。教師はそれに向かう手立てを考えていく。ボードゲームはその手立ての一つである。さまざまなゲームがあるが実態把握から始めて、児童の目的に合ったものを活用したい。
- ・主体性を伸ばすには、自立活動に児童の好きなことを取り入れるとよい。好きなことを見つけるには、実態把握が必要である。
- ・自立とは、自分の思いや意思を教員や友達に伝えられることである。特別支援学校は体に関する自立活動を多く取り入れている。特別支援学級では、交流学級の仲間とスムーズなコミュニケーションを図れるようにするための自立活動を仕組むことが多い。提案では、児童同士がゲームを行う中で必要と感じて話し合っていく点がよい。

助言者指導

愛知県 岡崎市立山中小学校 教頭 鈴木 巨裕

- ・できること・できないことを洗い出し、個別の指導計画に今年の目標を入れ、自立活動の6区分 27 項目にあてはめる。気を付ける点は、個別の指導計画を保護者・本人と共に作成する点と、学期ごとに見直し、学年末に三者で来年度どうしたらよいか決定しておく点である。
- ・児童の好きなこと、得意なことを洗い出し、児童のよさを生かす個別最適な指導の工夫が見られた。児童の意欲を活用できる教材であった。また、視覚優位なら電子黒板の活用、聴覚優位なら言葉で説明、経験を積むことで心理的安定があるなら同じゲームを何度も行うなど、児童の得意な点や特性を支援に活用できていたことがよい。
- ・なぜボードゲームか。教員がボードゲームを好きなため楽しく学習の準備ができる。但し、教材ありきではなく、子供ありきの視点で、まずは児童が楽しくなければならぬ。
- ・一人一人に本時のめあてがあり、児童に認識をさせることが重要である。「あなたのめあては〇〇ですね。」と確認をしたり掲示したりするとよい。常にめあてを意識できる状態にしておき、勝ち負けに意識が向かないようにしたい。
- ・各地域の制度を知り活用していくとよい。全校体制で特別支援教育について学ぶ機会をもつとよい。

提案②

岐阜県 関市立下有知小学校 教諭 横山 侑也

「自立し、主体的に社会参加する能力を養う自立活動の実践～A児、B児の社会性の育成を目指して～」

抽出児 A、B の実態と変容、ツイスターゲーム、教室リバーシの実践紹介から

(1)主体的な学びを生み出す工夫

①児童が授業の見通しをもてるような指示の出し方の工夫

- ・電子黒板を活用して児童に見通しをもたせたり、意欲を高めたりする。

②活動の必然性を生み出す工夫

- ・児童の興味に合わせて製作したゲームの道具を使用することで、意欲を高める。
- ・対戦中に起こるトラブルについて、話し合いを通して解決策を生み出し、うまくいく成功体験を積み重ねる。(PDCA サイクルで「みんなが楽しい」ゲームをめざす)

(2)指導と評価の一体化

①SC との連携による SM 社会生活能力検査の実施

- ・検査により客観的に実態把握を行い、個々の課題を設定していく。さらに、児童自身が自分の課題を把握してめあてを立て、活動に生かす。
- ・ゲーム内での指示の出し方や受け止め方、作戦タイム等における意志の伝達に関する振り返りを行う。(自己評価・他者評価)。

<成果と課題>

- ・職員による観察や懇談等の実態把握に加え、SM 社会能力検査を活用することで、より客観的に実態を捉えることができた。
- ・「全員が楽しめる」を合言葉に活動し、トラブルが起きたときも、ルールを改善する過程で自分の気持ちを伝える力や、相手の気持ちを受け止める力を伸ばすことができた。
- ・個に付けたい力に対応する小集団でのゲームの内容や方法、ルールについてさらなる検討が必要である。

研究討議

研究協議の視点(主体的に活動に取り組む指導の工夫)

(生活の基礎を作り、生活を高める指導の工夫)

- ・「自立」の授業は、実態に応じて6つの指導内容からめざす目標は異なる。
→自分の想いや意志を伝えること、特別支援学校(重複学級)では、体調が悪いことをサインで伝えることなど。
- ・「主体的に活動に取り組む」ためには、まず「好きなこと」を教材にすることが有効である。そのため、児童生徒の好きなことや得意なことを見つけることが必要である。
- ・自分の考えが仲間に受け入れられた経験から児童の変容が見られた。
- ・話し合い活動や「振り返り」を設定することで、「こんな力が付いた、こんな自分になれた。」と自覚したり、教員と共有したりすることで成長する。さらに付けた力を他の授業や生活に生かせるとよい。
- ・自立活動で用いているゲームの紹介 (通級指導教室での実践例)
→自分のやりにくさをモンスターに見立てることで、やりにくさを受け入れやすくなる。客観的に自分を捉えることにつながる。(「ソーシャルスキルモンスター」等)

助言者指導

岐阜県教育委員会 岐阜教育事務所 教育支援課 充課長補佐 洞口 美樹

・横山先生の実践のよさのキーワードは「必然性」

(1)主体的な学びにつながる工夫:ルールや活動内容が理解しやすく発展していくゲーム設定。

(2)めあて達成に向けた学びにつながる工夫:児童のめあて(苦手を克服、得意を伸ばす)、教員の指導目標・指導内容・場面の設定(指示役が相手の様子を見る、相手の指示を待ちながら自分の気持ちをコントロールするなどの必然性のあるゲーム)

・今後につなげるために…同じゲームでも様々な要素が含まれることをふまえて

→実態に応じた指導内容を組み立てる。(例:動きの見通しをもつ、話を聞くときの目線)

→より効果的な指導方法を工夫する。(例:決まった台詞なら言える→自分の考えを自信をもって話せる)教材や指導内容を選び設定する。そのための実態把握が大切である。

・学習指導要領「自立活動」の P121、「生活単元学習」については P33 を参考にされたい。

提案①

福井県立福井南特別支援学校 教諭 揚原 みさと

「キャリア教育という視点で振り返る A さんの本校での 12 年間と卒業後の生活」

【小学部】チャレンジタイム(自立活動)で手先の訓練、苦手なことにも最後まで取り組む、お金を得る大変さ・大切さを学ぶことができた。

【中学部】レザークラフト(作業学習)で目標や評価を意識すること、作業ノートを活用しながら自己評価や困ったときに聞くことを学ぶことができた。

【高等部】経験を積み重ね技術を向上させ、それに基づく進路選択ができた。

〈成果と課題〉

- ・小では、自己有用感、役割の理解、金銭を得ることの大変さへの理解が深まり、友達や教師との関わり方が身に付いた。
- ・中では、働くことの知識や技能の獲得、周りの指示・助言を理解して実行する力が付いた。
- ・高では、目標選択と達成への取組を行い、必要な支援を求める力を付けて経験に基づく進路選択ができた。
- ・学校全体として、さらに 12 年間の指導体系を全職員が共通理解を図る。そして、学部ごとだけでなく、学部間の交流をさらに深めることが必要である。

研究討議

研究協議の視点(主体的な進路選択のためのキャリア教育の在り方)

(地域資源を活用した作業学習の在り方)

(関係機関との連携の促進)

- ・就労には嫌なことも我慢していく力が必要である。そのためにどのような指導をしていけばよいのか。人間性も大切になってくるだろう。周りから愛される人材の育成も必要である。
- ・年間指導計画は、学習集団の特性や能力によって柔軟に変えていくことができるとよいのではない。毎年見直すことも必要である。
- ・進路選択について、情報は提供するが最終的には自己決定をすることが大事ではないか。そのためにも、早めに外部からの情報を得て伝えていくことができるとよい。
- ・保護者への進路指導は親との関係づくりが大事である。
- ・個別最適な学びは大切である。好きなこと、得意なことから入ることはよい。
- ・タブレット端末を使ってコミュニケーションをとる子もいる、実習先の理解がさらに必要となってくる。
- ・療育手帳について、卒業後の進路も視野に入れて保護者に理解をしてもらう。
- ・学校で現金が扱いづらい時代になっているが、中学校特別支援学級でも働いて報酬を得る経験は大事である。できる限り利益を得る喜びを体感できるとよい。

助言者指導

福井県教育庁 高校教育課 主任 池田 和義

- ・キャリア教育とは、自分らしい生き方を実現していく過程であるキャリア発達を促すことである。
- ・福井南特別支援学校の実践では、自己理解からスキルの習得へ、そこから役割や社会貢献へと各学部で身に付けたい力を明確にして、学習を積み上げているところが素晴らしい。

提案②

岐阜県 垂井町立不破中学校 教諭 小山 直美

「不破ぞうきを販売しよう

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けた作業学習の実践～」

(1)個別最適な学び

生徒一人一人の特性に応じた作業工程や道具を準備し、生徒自身が自分に合った作業を選択する「指導の個別化」を図ることで、「個別最適な学び」につながった。

(2)協働的な学び

先輩と同級生と特別支援学級以外の生徒、地域の方々など多様な他者となつたり、さまざまな活動を通して一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わさり、協働的な学びになった。

<成果と課題>

- ・個別最適な学びは自己肯定感を育み、将来へのキャリア形成につながる。協働的な学びは温かい人間関係を育み、自分も他者も大切にする人権感覚を形成する。この両者一体の充実が自分の可能性の認識となり、多様な人々となつたことで、よりよい未来の実現をめざすことができる。
- ・地域との協働を充実させるために、自ら主体的に他者との関わりがもてるような支援を行っていききたい。

研究討議

研究協議の視点(主体的な進路選択のためのキャリア教育の在り方)

(地域資源を活用した作業学習の在り方)

(関係機関との連携の促進)

- ・中学校での自立活動・作業学習では、好きなことや得意なことを生かして手作業での物作り活動を通して、自己有用感をもつことができる。
- ・生徒が主体的な活動ができるように、実態に応じた指導計画を作成する必要がある。
- ・個別最適な学びで行っている作業が、就労先でも働くことやお金を扱うことなどに生かされ、本人が尊厳をもって生きていく力となる。
- ・進路を決定するとき、どのように助言していくのか難しい。さまざまな情報を伝え、自分が納得して自己決定していくことが大切である。

助言者指導

岐阜県 岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 辻 香子

(1)作業学習で考慮する事項 学習指導要領

ア 働く楽しみやお金を使う喜び、相手からの感謝や励まし、貢献につながる。

イ 地域から材料の調達・販売ができる。持続可能で教育的配慮がなされている。

ウ エ オ 障がいや特性に応じた段階的な指導がなされ、得意なことを生かした意図的な協働的な学びの作業を取り入れている。

(2)材料を入手することや販売することなどの地域に立脚した活動がある。

(3)今後について

- ・自立や社会参加は、将来の職業生活や社会生活の基盤となる資質能力を育む。
- ・各教科と合わせた指導の評価では、目標を達成していくための教科を考慮する。
- ・「不破」とは、「破れず」という意味があり、「破れないぞうきんを作るんだ。」という意気込みが感じられる活動である。

提案①

富山県 富山市立蜷川小学校 教諭 深山 大輔

「お互いのよさに気付き、認め合うための学級づくり

～自立活動「こばと級1組 スマイル集会をしよう」の实践から～

- (1)子供たちが計画段階から力を合わせてつくる集会
- (2)自分のよさや友達のよさに気付ける振り返りについて

<成果と課題>

児童たちが自分たちで集会のルールづくりをすることで、互いを思いやる言動が増え、全員が楽しめる集会になった。また、「計画をして集会をする」という展開を3回繰り返すことで、見通しをもつ安心感や経験したことによる自信をそれぞれが感じることができ、それらの余裕から自他ともに客観的に物事をとらえることにつながった。さらに、「ナイス言葉」や振り返りの掲示をすることで、ポジティブな雰囲気構築することができ、さらなる肯定感の向上につなげることができた。

研究討議

研究協議の視点(個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫)

(学習支援と ICT 等を活用した教育環境整備の工夫)

(発達に応じた他機関との連携)

- ・児童の振り返りが短冊になっており、毎時間学級内で掲示するため、自身の振り返りや仲間の振り返りなどポジティブな言葉が可視化されていてよい。また振り返りの形式も、すでにいくつかのパターンから選択するもの、マス目や罫線があるものなど児童の実態や変容に合わせて児童自身が選択できる工夫があった。
- ・よりよい関わりやルールづくりに取り組むことで、児童が交流級で休み時間等に遊ぶ姿が見られるようになり、学級内でもポジティブな言葉やコミュニケーションが増えていった。
- ・個別の教育支援計画や指導計画を立てるうえで、自立活動6区分27項目のどの項目での支援が適しているか検討し判断することにより、適切な支援・指導が可能になると再確認できる機会となった。

助言者指導

富山県 富山市立藤ノ木小学校 教頭 小櫻 昌子

- ・丁寧な実態の把握があり、明確な目標の設定があった

教諭がねらいと願いをもって学習に臨むことの大切さを学ぶ機会となった。児童一人一人が、温かい人間関係を築くためにはどんな支援が必要か、児童の反応をたくさん想定するなど授業の見通しをもって、一人一人対応できるとよい。

- ・子供が願いをもって活動できることのよさがある

児童がなんのために集会をするのか、どのような集会にしたいかなど、イメージをもって活動ができていた。自閉・情緒障学級の児童は自他のよさを認め合うことに困難を抱えていることが多い。しかし、特性を理解し合うことやルールが変更できる余地のある活動であること、それぞれが感じた気持ちや考えを板書して共有することで自分たちのよさに気付き、交流することができた。教員自身が一緒に楽しみ、よきモデルとなって活動することで、児童の安心感と信頼が土台にある活動ができた。これらの活動を繰り返すことで、児童が自己選択・自己決定をし、自身に自信をもち、仲間と認め合うことができ、それらを共有することができるようになる。これらが自立するということや、社会参画することにつながっていく。

提案②

岐阜県 美濃加茂市立山手小学校 教諭 佐合 みさき

岐阜県 美濃加茂市立古井小学校 講師 廣江 めぐみ

「一人一人の「こうなりたい」という願いと障がいの特性に合わせた指導の工夫

～コミュニケーション能力を育むための活動を通して～」

(1)学級でのゴールを意識した単元指導計画の作成

児童の「こうなりたい」という願いに基づき、学級でのゴールを見据えた単元構想を行うことで、児童や関係職員、保護者とも身につけたい力を共有しながら学習を進めることができた。

(2)個に合わせたコミュニケーション能力を高めるための活動内容の工夫

児童の障がいの特性と、身に付けたいコミュニケーション能力に応じた学習活動を構想し、実践を行うことで、学級での学習や生活に生かすことができる力を身に付けることができた。

<成果と課題>

- ・学級でのゴールを明確にした単元の設定を行い、関係職員と密に連携を図りながら活動を行うことで、一人一人の特性に応じたコミュニケーション能力の基礎を身に付けることができた。
- ・単元の学習が終わると、活動からの学びが生かしきれなくなることがあるため、学びが継続していけるよう、見届けを続けていく必要がある。

研究討議

研究協議の視点(個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫)

(学習支援と ICT 等を活用した教育環境整備の工夫)

(発達に応じた他機関との連携)

- ・各自治体で通級指導教室の設置状況等に違いはあるが、今回の提案のように、児童の実態と願いに応じた学習支援を行っていくことは、今後も大切にしていきたい。
- ・教材や教具が非常に参考になった。児童の実態や特性に応じて工夫がされている。また、保護者と児童の状況を共有するための手立ても工夫されていた。
- ・通級指導教室のニーズが高まっているなか、各自治体の教育委員会等とも連携を図りながら、教室整備や担当教員配置等の動きが進んでいくとよい。

助言者指導

岐阜県教育委員会 特別支援教育課 課長補佐 林 幸代

- ・一人一人の願いを明確化・具体化した指導がなされていた。通級指導対象者は学習上、生活上の困難さがあるからこそ目標を明確にした指導が必要である。だからこそ、児童の「こうなりたい」を引き出し、学級でのゴールを見据えた活動を続けていたことは非常によかった。
- ・コミュニケーション能力の育成を個に応じた手立てで行っていたことがよかった。活動も、児童の障がいの特性に応じて楽しく活動できるように設定されており、楽しさを味わいながらも課題が克服できるような工夫がされていた。
- ・通級指導を校内の通常学級の職員と共有している点がよかった。活動のねらいや意図まで、通常学級の職員や関係職員と共有し連携することで、児童の成長につながると同時に、校内の職員の特別支援教育への理解を高めることにつながっていく。

提案①

愛知県 名古屋市立植田小学校 指導教諭 原 暁良

「自分に自信をもち、主体的に物事に取り組む生徒の育成

～グループ通級指導の活動を通して～」

(1)1学期

生徒のアイデアからプロジェクトを提案し、「もっとこうしたら…」とよりよいものにしようとする姿が見られた。通級メンバーから多くの賛同を受け、協力者が決定し、実行に移すことができた。

(2)2学期

プロジェクトの内容や具体策について生徒同士で話し合いができる場を設けたり、自分の得意を知ったりすることで、活動がより活性化し、生徒が主体的に活動に取り組むことができるようになった。また、「通級だより」を活用したことで、より多くの教職員からフィードバックをもらい、自己効力感を高めることができた。

<成果と課題>

- ・初めから諦めてしまう姿から、自信をもって自ら主体的に物事に取り組む姿へと変容する様子が見られるようになった。
- ・今後も自己選択・自己決定を柱とし、自分たちで問題や課題を捉え、他者と協働しながら自分らしさを発揮する活動を行っていくことで自信を高め、その自信が他の活動にも主体的に取り組む原動力となるようにしたい。

研究討議

研究協議の視点(個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫)

(学習や進路選択に支援と ICT 等を活用した教育環境整備の工夫)

(発達に応じた他機関との連携)

- ・集団指導も大事だが、個別指導も大事である。子供自身の写真を使って振り返りをした方が有効なので、振り返りは個別で行うなど、使い分けるとよい。
- ・まずは、肯定的な自己理解をしていく必要がある。自己理解は否定的になりやすいが、教員からの言葉かけや子供自身の振り返りだけでなく、子供同士など、多くの人に認めてもらうことが大切である。
- ・生徒の実態に合わせて何を指導するかを考え、学年間で情報共有をして連携を図っている。通級指導教室とも連携を図っていくことが大切である。記録に残して、担任・学年主任・生徒指導主事・教務・教頭・校長の順に回覧できるようにしている。
- ・環境整備をしたり、本人のニーズに沿った関わりをしたりすることを通して、安心感を抱いたり、学校への興味をもったりすることができる。社会に出たときに力が発揮できるようにすることは永遠のテーマであり、難しいことではあるが、支援していきたい。
- ・通級指導教室担当者の専門性の向上を、持続可能な方法でしていく必要がある。
- ・通級指導教室が小学校にはあったが、進学した中学校にはない。ニーズはあるが、設置が追いついていない現状である。

助言者指導

愛知県 名古屋市立西特別支援学校 校長 森 浩隆

- ・意図的に褒められたり認められたりする場を設定し、自己肯定感を高めていこうとする仕組みをつくり、授業で取り組んだ実践報告だった。生徒に伴走し、つまずきそうになったところでさりげなく言葉をかけたり、方向性を示したりといった支援を行っていた。
- ・通級指導教室に通う生徒同士でグループをつくって活動することは、学習者同士が対等な立場で学び合うことができ、仲間との協力関係も築きやすい。課題をみんなで解決することのよさを知ることや、自分の意見を認められる機会も増えることで、これまでできなかったことも「友達とならできる。」という心の変化に繋がった。
- ・生徒が主体的に取り組めたのは、目標設定にあった。活動に取り組む仲間と議論し、どのように解決に導くかというやり方を手に入れた。そのことで課題が分かり、一人では難しいが、みんなで頑張ればできるかもしれないという目標を見つけ、自分の意志で決めることができたのではないかな。
- ・自己選択・自己決定は、社会で自立して生活を送るうえで不可欠な要素であり、充実した人生を送るために必要である。学校の活動のなかで自己選択・自己決定の機会を位置付けることで、自分で決めたことに対する責任感の芽生えや、選択を行う上で選択肢を比較し、最適なものを選ぶことによる問題解決能力の高まりが期待できる。そのためには、失敗を恐れず挑戦できる学習環境や、選択するための情報や選択した結果を予測される適切な情報の提供、困ったときに相談できるサポート体制が大切である。
- ・効果的な指導ができるかどうかという視点も大切にし、個別の指導計画の実践、適切な評価をもとに改善を行い、周りの児童生徒との関係や教員との関係、在籍している学級での状況と、様々な要因についても把握しながら、引き続き指導に努めていただきたい。



提案②

岐阜県 岐阜市立草潤中学校 指導教諭 澤田 美由紀

「一人一人の教育的ニーズに寄り添う支援の工夫

～仲間の中で自己表出する力を育む小集団活動～」

(1)仲間との関わりや自己表現力の高まりをねらった年間指導計画の工夫

年度当初は、生徒が取りかかりやすいクイズやゲームの要素が強い活動を行い、生徒同士が関わり、楽しさを共有するようにした。9月頃からは、日常生活での困り感を互いに出し合い、それを解消するアイデアを話し合う「お困りごと相談」を帯の活動として位置付けた。相談できる時間を設けたことで安心して本音で語り合い、分かり合える仲間意識が芽生えるようになった。

(2)話し合いの手順書の活用

話し合いを自分たちで行えるように手順書を作った。そうすることで、話し合いをどのように進めるのか見通しがもて、司会者や記録者などにも主体的に立候補するようになった。また、自分たちで解決する経験が積み重なることで、前向きに困りごとを解決していこうとするようになった。

(3)個別指導と小集団活動をつなげてコミュニケーションの力を伸ばす学習サイクル

年度当初に「こんな風にコミュニケーションが取れるようになりたい。」と目指す姿を明確に思い描いた。その目標に向けて、担当者とスモールステップを決め活動することで成長を実感することができ、自分に自信をもつことができるようになった。

研究討議

研究協議の視点(個別の教育的ニーズの把握と指導や支援の工夫)

(学習や進路選択の支援と ICT 等を活用した教育環境整備の工夫)

(発達に応じた他機関との連携)

- ・通級をする際に大切なのは、個別でやることと集団でやることのつながりを意識すること。だからこそ、どのようにつなげればいいのか何をすればよいのかが難しい。
- ・夜間にやるというのは画期的なこと。ただ、教員を取り巻く働き方改革やほかの先生との連携などマイナス要素もある。そうした要素を踏まえながら今後どのようにしていけばよいのか改善点を常に考えていくことが大切である。
- ・通級というのは個の特性とどのように向き合って生活していけばよいのか考えることが多く、個別でやるイメージが強くて集団でやることは珍しい。こうした実践から、集団面で課題をもつ児童生徒の支援の在り方を考えていくのも大切である。
- ・通級で取り組んだことを般化させることが大切。通級でできたことが学校生活や日常でできたかを確認し、できたときに認める場の設定があるとなおよいのではないかな。

助言者指導

岐阜県 岐阜市教育委員会 学校指導課 主査 神山 典子

- ・通級を夜間に行うことは珍しい取組ではあるが、夜間でも日中でも大切にしたい視点は同じであり、丁寧な指導がされていてよい。
- ・子供主体の指導を行うことが大切である。個別指導で「どんな自分になりたいか」を考える場を生み出し、生徒が何を学ぶのかという目標をもたせることが重要である。
- ・具体的な支援を思い描いて行っていくと、ある程度の活動は生徒に任せることができる。そうした活動が生み出されているので生徒が主体的に活動していてよい。
- ・個別だけでなく、集団の活動を取り入れることで、周りの仲間とつながることができ、仲間との関わりについても学べている姿がよい。
- ・自己表出するときには必ず仲間が必要となる。集団の活動を取り入れることで、自己表出の場が位置付いており、よい活動となっている。

提案①

石川県 金沢市立中央小学校 芳齋分校 教諭 浅田 賢宏

「肢体不自由学級に在籍する児童の交流及び共同学習

～児童なりの活動や、関わり方ができるような支援のあり方について～」

- ・「みんなと」「さまざまな経験」「安全」を意識した交流の実践。「学習」「行事」「給食」「休み時間」での実践の紹介。
- ・それぞれの場面で、交流級の担任や保護者・主治医・栄養管理士・バス会社・見学先等と打合せや事前の準備・確認を十分に行った。
- ・交流場面での本児の学習の活動内容や行事の参加量を調節することで、「みんなと」一緒に活動できるようにした。
- ・休み時間に支援学級を開放したり、1年生の教室で説明する機会を設けたりすることで、多くの児童が興味をもち、理解をすることで、関わり合いの素地をつくった。

〈成果と課題〉

- ・普段の授業や行事・見学でも事前の準備を行い、さまざまな場合を想定し、綿密な打ち合わせや確認などしておいたことで、安全に落ち着いて、本児なりの活動の仕方をすることができた。
- ・交流級の担任や授業の担当の先生と交流する機会をより多く設けることが必要であった。

研究討議

研究協議の視点(豊かな関わりを育む交流及び共同学習の在り方)

(ねらいを明確にし、組織的に行う交流及び共同学習の在り方)

- ・交流の授業参加については、本人の意向、保護者、教員の思いをどう合わせていくか大切となる。
- ・すべての活動において、丁寧なやり取りや事前の準備が、よい実践につながる。
- ・子供は「今」が大切。子供にどう考えさせるとよいか課題となっている。見通しをもって学ばせる働きかけが必要である。
- ・学年・学級に行き渋りがあるとき、どうアプローチしていくとよいかを追求する必要がある。一部の子は気にかけてくれるが、集団との距離ができてしまう。より多くの子供が関わってくれるようにはたらきかけていくことが、「行き渋り」の取組になる。
- ・教師が、「どの子にも居場所がある」ことを大事にする構えをもつことが大切である。係活動などがよい機会になる。
- ・その子なりのねらいをもたせて、交流級でも認めてもらうよう、交流級の担任との連携をとる時間が大切である。そうした組織的な取組によって、子供同士の交流が生まれる。
- ・交流級の担任にも、どんな力を付けさせるか、ねらいをもってもらうことが必要である。

助言者指導

石川県教育委員会事務局 学校指導課 主任指導主事 松本 学

- ・交流および共同学習の保証がされていた。目的をふまえた共同学習であった。
- ・医療ケアは、学校において安全に実施されなければならない。そこには活動の制約がある。
- ・そこで、浅田先生は「みんなと一緒に、たくさんの友達と関わってほしい」という願いから、環境づくりが行われていた。
- ・多くの人と場の設定を行っている。「仕方ない」で終わるのではなく、「当たり前」に子供たちとの活動の機会を設ける大切さがある。
- ・思いの強弱によって、共同の機会が左右されてしまう。「少しでも」という教員の願いが大切。
- ・看護師との意見の調整が大切。看護師は看護師としての願いや立場がある。教師は教師としての願い、立場がある。「なぜ」「何のために」「どうするか」を話し合っていくことが大切。

提案②

岐阜県恵那市立大井第二小学校 教諭 中村 美香

「多層的な支援により、すべての子が「つながり」「学び合う」交流へ

～多層指導モデルMIMの活用と特別支援学校籍児童との交流の実践～

(1)多様な子どもたちが、「共に学ぶ・感じる」ための環境調整

共同学習を支える「予防的・継続的支援」の枠組みとして、「多層指導モデルMIM」を導入することで、つまづきを早期に発見し、学習・生活意欲の低下が見られる前の支援を構築することができた。

(2)通常学級内での事前学習と相互理解の土台づくり

年間計画に基づいた遊びの交流を行うことが、仲間意識や活動意欲の向上となり、行事への参加につながった。

(3)個別ニーズに応じた柔軟な支援と、連携による効果の検証

特別支援学級や1年生の生活科単元への参加を通して、互いを理解し尊重しながら学習することができた。

<成果と課題>

- ・母集団となる通常学級の気持ちの醸成をねらい、MIMを活用したことで、交流＝「ともに過ごす」＋「ともに学ぶ」ことの有効性を改めて感じるすることができた。
- ・交流の経験が一過性のものにとどまらず、子供たちの中に「思いやり」「自己理解」「他者を尊重する心」などの非認知的な力として根付いていくよう、継続的かつ計画的に活動を積み上げていく必要がある。

研究討議

研究協議の視点(豊かなかかわりを育む交流及び共同学習の在り方)

(ねらいを明確にし、組織的に行う交流及び共同学習の在り方)

- ・子供一人一人の思いや特性を丁寧に把握し、安心して交流に臨める環境調整を行うことで、豊かな関わりの土台ができる。
- ・交流および共同学習の「ねらい」を、本人や特別支援学級と交流学級の担任が共有し、場合によっては管理職も共有することで、組織的な支援体制を構築することができる。
- ・年齢が上がってくると一部の児童だけが声をかけるなど、子供同士に距離ができていく。高学年や、中学生の児童の関わり方についても考えていきたい。
- ・MIMを活用した言葉の学習を軸にした環境調整は、関わりの力を高める有効な手立てであり、学級全体を対象とした交流支援として有効である。市を挙げた ICT 活用の取組も含め、継続的な実践と工夫が求められる。

助言者指導

岐阜県教育委員会特別支援教育課 課長補佐 高橋 雄一

- ・子供たちが年間計画に基づき、遊びや行事を通した自然な関わり合いの中で、成功体験を重ね達成感を味わいながら他者理解を深めることができた。また、異校種間でも教員同士の連携を密にし、子供たちが主体的に考えて活動に取り組むことができた。
- ・通級指導教室を利用する児童が増加しており、学習障害などに起因する自己肯定感の低下や、それに伴う二次的な問題が見られる児童も少なくない。MIMを取り入れた予防的な支援は、すべての児童が豊かに関わり合うための交流の土台づくりとして、効果的であった。
- ・個別の支援計画の目標達成が不十分である場合がある。特別支援学級と交流学級の担任同士が連携し、個別の支援計画を活用しながら、双方にとって十分な学びとなるよう、ねらいを明確にした授業を計画・実践する必要がある。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 1 日目 アンケート結果（オープニング）

◎「オープニング」に関わるご意見・ご感想

- ・誰もが奏でられるアングルン、本大会に相応しい素敵なステージであった。
- ・アングルン演奏を聴くのも演奏するののもとてもよかった。どんな方でもすぐできるというのが素晴らしかったし、とても興味深かった。
- ・アングルンの演奏とても素敵！誰でもできる！異なる音の調和という言葉が印象に残った。
- ・一人一人に楽器が用意されており、すぐにアイスブレイクになった。
- ・アングルンという楽器の音色に感銘を受けるとともに、一人一人に用意されたアングルンを使って、曲を奏でる一体感にさらに感銘を受けた。素敵なオープニングであった。また、簡単に演奏できるカラーブロックを使った支援もぜひ、活用したいと思った。
- ・特別支援学校生徒による演奏と会場全体で創る温かい時間を楽しむことができた。アングルンをみんなで分担して創る音楽のように、一人一人の個性を認め合い全員が楽しい世界になっていけるとよいと感じた。
- ・アングルンの素敵な演奏に癒された。視覚的な工夫をした演奏の支援、ゲーム性のある支援など、支援のヒントももらった。
- ・高等部の皆さんで作上げた音楽は、とても素敵。一音一音を担当し、同じ音でも違いがあり、それによって音楽に深みが出るという話を聞いて納得した。
- ・参加型が楽しかった。楽譜が読めなくてもあの画面を見ながら、即、演奏ができ、特別支援の子供たちにも達成感をもたせることのできる素晴らしい教材だと思った。
- ・アングルンの演奏がとてもよかった。人によって演奏の仕方が違って、それがよい味となる素敵な取組だと思った。会場が一体となってとてもよかった。
- ・アングルンの演奏体験を通して、一つの音が欠けてもだめで大切な一部であり、同じ音でも人により鳴らし方が違うなど、多様性の中の調和を実感することができた。
- ・異なる音をそれぞれが響きわたらせ、会場が一つになる素晴らしいオープニングであった。
- ・インドネシアのアングルンという楽器に初めて触れ、初めて音を聴き、心地よい空間だった。支援学校の生徒さんの演奏も素敵だった。知らない方々と一体感が生まれる工夫があり、よいオープニングだった。
- ・アングルンの演奏を通して、会場が一体となり、大会主題である「多様な人々とのつながり、幸せや豊かさを感じる」瞬間であり、感動した。特別支援学校の生徒さんたち、力を合わせた素敵な演奏をありがとうございました。
- ・アングルンという楽器を初めて知りましたが、「誰でもできる 1 番やさしい楽器」ということをとても実感した。鳴らし方は単純ですが、音色や鳴らし方は様々で、子供たちが音楽を楽しむにはとてもいい楽器だと思った。今回感じたことをアングルンに限らず、日々の音楽の楽器の指導に生かしていきたい。

○今後の課題に関わるご意見

- ・楽器が座席に置かれて座りにくかったことや、わずかな振動で落下して、中には破損していたものもあったように見受けられた。こうしたことを考えると、参加者による合奏の難しさを感じた。
- ・よかった。ただ、演奏してくれた生徒にもう少しスポットライトがあたるとよかったと思う。せっかく演奏してくれたのにあっけなかったように感じた。
- ・アングルンの演奏がとても素敵であった。サテライト会場だったので、演奏に参加することができずとても残念だった。どのような楽器が見たかったので、一つでいいのでサテライト会場にも展示していただけるとうれしかった。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 1 日目 アンケート結果（開会式）

◎「開会式」に関わるご意見・ご感想

- ・オープニングからの配置転換が手際よくできていた。
- ・会長さんのスカーフを交えたお話や信長の障害のある人の周りにまで施した逸話など、素晴らしいお話であった。会長さんのお話を聞いただけでも来た甲斐があった。
- ・多くの方々のご準備で開催されていることが分かった。
- ・信長のエピソードは初めて聞きました。本人にも周りの人にも支援をという言葉が印象に残りました。
- ・サテライトだったが分かりやすかった。
- ・多くの県からの参加と協力が分かった。
- ・特別支援教育について様々な方面から活動が知れてよかった。
- ・岐阜の映像が綺麗でよかった。
- ・岐阜の教育や魅力について分かりやすく紹介されていて引き込まれた。
- ・様々な先生方のお話を聞くことができ、大変勉強になった。
- ・他県の方との交流の場を設けていただき、ありがとうございました。
- ・会自体は非常にスムーズに進み、特に問題なかったと思う。来賓の皆様のお話もとてもよかった。
- ・「一つしかできない」を「一つでもできる」とよい捉え方ができるように意識したいと思った。
- ・ご挨拶された方々が一貫して、共生社会の実現に向けた思いを発していたのが印象的であった。
- ・とてもシンプルに感じて分かりやすく、よいと思いました。
- ・岐阜って素敵な場所だなと知った。開催への思いやご苦労が伝わってきた。
- ・丁寧な自己紹介とスクリーンに流される字幕、話の内容を確認することもできてよかった。
- ・学びの多様なニーズに応える環境の大切さを再確認した。
- ・大会長、来賓の方のご挨拶も、多様性がテーマとなっていた。そのことをしっかり認識して会に参加することができた。
- ・なかなか県をまたいで研修ができないので、いろいろな県の方のお話を聞くことができよかった。
- ・自分を含めた、先生方の特別支援の専門性を高めていくことが喫緊の課題であることがよく分かった
- ・それぞれの立場の方が、今の特別支援への思いや、考えについて語ってくださり、よかったと思う。
- ・様々な役職の方の支援があり、岐阜大会が行われていることをひしひしと感じた。
- ・多様な人々となつながら、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成は大切なことだなと、感じているのでこの大会に参加できてうれしく思った。

○今後の課題に関わるご意見

- ・延長した部分がどこだったのか振り返って、次年度は予定の時間で終わるとよいと思う。
- ・（全体会の時間が）長かったので、もう少し省略できるところは省略した方がよいと思った。
- ・もう少し内容が絞られるとよいと思った。
- ・30 分以上は、長いと感じた。

第47回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 1日目 アンケート結果（全体会：岐阜県の特別支援教育の現状と課題）

◎「全体会」に関わるご意見・ご感想

- ・岐阜県の現状を知ることができた。県全体で教育する側を育てるシステムが素敵だと思った。
- ・通級の子供の割合が多くて驚いた。特別支援教育担当の教員への研修が充実していて羨ましい。
- ・特別支援教育の現状について、県が違っても同じだと分かった。
- ・岐阜の通級指導教員の研修や、高等学校でも通級指導を行っている点が良い。
- ・他地区でも同じように支援の在り方を考えているのを知ることができてよかった。
- ・前回も岐阜大会に出席したが、今回も具体的な施策や数値で、とても分かりやすく、参考になった。
- ・岐阜県の特別支援教育の取組について大変よく分かった。特別支援教育を取り巻く諸課題に対応すべく、教員の専門性向上のための研修の種類や視点も充実した内容であると思った。
- ・特別支援に関わる教員として、専門性を磨いていきたい。
- ・岐阜県内の支援学級の増加率に驚いた。
- ・端的に話していただけた。視覚障害の支援について知ることができてよかった。
- ・岐阜県の特別支援教育の話がよかった。勤務校のみなさんにも聞かせたい。
- ・改めて学ぶことがあり、とても有意義な時間となった。
- ・恥ずかしながら知らないことばかりで、魅力的な話題で引き込まれた。
- ・岐阜県の現状がよく分かった。ますます特別支援教育に関わる先生が必要になる。
- ・コア・ティーチャーのシステムはとてもよいと思う。
- ・特別支援教育に関わる子供の増加が止まらないという現状、我々教員の専門性の向上が大事だと思う。今回のような研究大会に多くの方が参加できるような方法を考えていきたい。
- ・岐阜県で取り組まれてきた「多様な人々とのつながり、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成」に取り組まれてきたことについて、県母体が広範囲にもかかわらず、アクションプラン2025の取組み、そして、中学校までではなく、高等学校までの学びの充実として、自校、他校、巡回校と教育支援されていることに驚いた。
- ・岐阜県の特別支援教育の実態と課題について、分かりやすく説明された。特別支援に関わる教員の資質向上のため、いろいろな研修があり、充実していると思った。特に新任のときに手厚く研修があるのはよい取組だと感じる。
- ・岐阜県の特別支援を担当する先生方を支える研修がよいなあと思う。
- ・岐阜県の通級指導の制度が、進んでいることに驚かされた。他の県を知ることは大切。
- ・岐阜県の特別支援や通級の実情を知り、とても驚いた。組織として、まとまりがあることをうらやましく感じた。企業を通じて、価値ある唯一無二の物として社会に貢献し、主体的に参加できているのが素晴らしいと思えた。人としての尊厳を感じられ、常に支援を受ける側だった障がい者が違って見えてきた。

○今後の課題に関わるご意見

- ・全体会が終わってからの待ち時間が長かったのが気になった。
- ・県の現状を分かりやすく伝えていただけた。せっかくなので、東海北陸の現状なども毎年の状況を追いながら伝えていただくとより地域の特徴が理解できる。
- ・資料をいただけるとありがたいと思った。
- ・途中休憩が、やや長すぎた。サテライト会場では時間をもて余していた。
- ・サテライト会場では、見ているだけ、聞いているだけだったので残念。

第47回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 1日目

アンケート結果（講演会：「異彩を、放て。」 株式会社ヘラルボニー 神 紀子 様）

◎「講演会」に関わるご意見・ご感想

- ・ヘラルボニーの理念について感銘を受けた。
- ・胸が熱くなった。学校内でも子供同士でも偏見が往々にしてある。互いを認め合い、よい意味で面白がれるようにするために、私ができることを考え実行していきたい。
- ・特別支援教育を要する子供たちに対する考え方が180度変わった。
- ・多様性の意味と障害の有無に関わらず、生き甲斐をもつことの大切さを学んだ。
- ・「できない」を「できる」ではなく、「できる」を伸ばす考え方に共感した。
- ・子供たちの得意にもっと目を向けて、支援される人間として見るのではなく、ただの一人の人間としてどう社会に関わっていくかを考え、指導を行いたいと思った。
- ・校内のいじめを見逃さない日や人権週間で、全校生徒に紹介したいなと思った。
- ・できないことをできるようにするのではなく、できることを異彩とするという考え方を、しっかり胸に刻みたい。
- ・世の中の考え方を変えていくという信念が素晴らしいと思った。できないことをできるようにするために無理をさせてしまう自分がいるので、考え方を変えて、いろいろな見方のできる人になりたい。
- ・神さんの仕事に対する情熱や思いが伝わり感動した。障がいと障がいとせず、共生できる世の中にしていこうとされているところに感心した。
- ・教育現場にいる私たちは、まさに子供たちが夢中になっているもの、好きなこと、やり続けていることを止めることなく、価値付け認めて伸ばしていくことが大切だと思った。
- ・神さんの人柄も相まって、深く感銘を受けた。こうして、社会が動き出すことを仕組んでいくうねりができるといいと感じたし、現場でできること、生徒のよさや可能性を応援することをどんどんしていきたいと感じた。
- ・自分が知らない内容のお話で、大変興味深く聞くことができた。アンコンシャス・バイアスは誰しもが無意識でもっているということだったが、お話を聞いていく中で、自分自身も確かにあることを実感した。ぼろっと口にしてしまう、行動に出てしまうことが怖いと思うので、無意識であることを意識していくという難しいことを日々の生活のなかで実践して、自分の感覚を研ぎ澄ましていく必要があると強く感じさせられた。
- ・「価値がないと思われていた物に価値を見出す」「ミックスジュースではなくフルーツポンチ」「アンコンシャス・バイアスは誰にでもある」「違いを面白いと思える世界」という言葉が心に残った。異彩を放つ作品たちも、それを商品にした形も魅力的であった。
- ・人を人としてお互いが尊重できる、そのような世界に、心からなれるとよいと思った。
- ・「異彩を放て」で神さんの講話を聴かせていただいて、マイノリティの意識変化とマジョリティの変容との関係性について考えさせられた。
- ・「ミックスジュースではなくフルーツポンチ」という言葉が印象に残った。一つ一つがあるからこそ全体の調和がとれるということを大切にしたいと痛感した。
- ・作品が色彩豊かで手に取りたくなるものや本物を見たいと思うものがたくさんあった。子供たちの可能性を引き出し、強みを生かしていけるように自分にできることは何かと考えさせられた。
- ・ヘラルボニーという企業を通じて、価値ある唯一無二のものとして社会に貢献し、主体的に参加できているのが素晴らしいと思った。人としての尊厳を感じられ、常に支援を受ける側だった障がい者が違って見えてきた。

○今後の課題に関わるご意見

- ・講演会の講師は、教育関係者だけではなく、今回のように一般企業の方や医療・福祉関係者など、様々な方に幅広くお話いただけるとよい。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目 アンケート結果（第 1 分科会：支援体制【地域・校内】）

◎「第 1 分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・各学校や市町との繋がりの大事さを、改めて感じた。また、小グループによる討議では、気軽に話ができてよかった。
- ・先進的な実践、他地域の取組について知ることができ大変勉強になった。早速飛騨市の視察をお願いしたいと思った。
- ・他県の先生方と意見交換ができ、充実した時間を過ごすことができた。
- ・他県の状況など含め、多くの知識を得ることができた。個でできることから始めてみたいと思った。
- ・飛騨市と浜松市の大変素晴らしい地域連携とコーディネーターの役割を感じた。私も、自分の市や自分の学校の強みとリソースにつなげていきたい。
- ・私もコーディネーターとして、校区内の小・中学校と連携し合う機会をつくりたいと思う。
- ・連携に関わって、今自分の学校でできることを精一杯頑張りたいと思う。まずは、小 6 の児童を中学校に招いての交流会をもちたい。
- ・様々な機関との連携を図っていききたい。自立活動で生かすことのできる実践についてもたくさん教えていただけてよかった。
- ・特別支援コーディネーターとして、いろんな連携を図られていて素晴らしいと思った。全ては子供たちのために。自分はどれだけでできているだろうかと考えさせられた。今回、学んだことを少しでも日々の実践に生かしていきたい。
- ・行政のありかたやそれに関わるコーディネーターの責任ややり方の改善さまざまなことを考えるきっかけとなった。
- ・中学校区の特別支援コーディネーターで定期的に情報交換できているのがとてもよいと思った。
- ・特別支援教育の考え方やコーディネーターの果たす役割の重要性など、学ぶことができた。自立活動の中での自分研究はぜひ取り入れていきたいと思った。グループ内で各校の様子を交流できたことも良かった。
- ・作業療法士さんの活用について参考になった。
- ・学校内での連携の事例がとても参考になった。積極的に自分からつながることも大切だと感じた。
- ・作業療法士の学校での活用を知り、取り入れられたらと思った。また、全ての児童に対して特別でなく、支援できる体制は素晴らしいと思った。
- ・若い先生方の発表・実践が熱意がこもっており、素晴らしかった。縦のつながりの動きがとれないか、できることから考えてみたい。浜松市や飛騨市の取組を持続可能に取り入れていけるよう、周りの方に相談し、巻き込みを頑張っていきたい。
- ・小グループの話合いができて、他県の状況を知ることができたことがとても有意義だった。コーディネーターとして空き時間がないと通常の学級のサポートが難しいことを改めて痛感した。
- ・通級の連携が聞けてよかった。

○今後の課題に関わるご意見

- ・事例発表は具体的で大変わかりやすかった。意見交流や全体での討議の時間はもう少しあってもよかったかと感じた。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目 アンケート結果(第2分科会:教科学習)

◎「第2分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・具体的な実践を知ることができた。子供の実態だけではなく、支援員の先生の配置についても各県で大きな違いがあることに驚いた。子供の実態に合わせた教育課程を組むことが一番難しいと感じた。
- ・他県の先生の実践を聞き、交流ができて参考になった。人が足りない、時間がないなど、どこの地域でも悩みは同じなのだと共感することができた。
- ・実践報告では子供の実態に合わせて寄り添う指導が多く聞けてよかった。特に「ずらし」と「わたり」の技法は、用語自体は初めて知ったが、これまでに全国の先生方が自然にやってきた事だと思う。名前がついた事で今後いっそう意識して取り組めると感じた。引き継ぎの仕方、進路指導への考え方など、各県でさまざまな方法があること知って勉強になった。
- ・各教科の学習を考えるに当たって、ただ教科の学習を行うのではなく、子供の実態を把握して、一人一人に合った目標と授業内容の設定が大切なのだと感じた。子供たちが楽しみながら学ぶことができるように、生活単元学習と教科を紐付けながら活動内容を工夫したいと思った。
- ・教科学習を生活に生かすことが日々課題である。経験が少なく、興味の幅の狭い子供たちの学習が充実したものになるように、今日の提案や助言を生かしていきたい。
- ・豊かに生きる力を育む教科指導を行っていくためには、子供の実態を把握し個に応じた対応をしっかりと考えていかなければならないことを再認識した。「人と同じでなければならぬ」という必要はない」と、子供たちに伝えていけるように、子供たちの長所に着目してその力を伸ばしていきたいと強く思った。
- ・三重県の報告は児童の特性に合わせたいい支援についての報告で、子供たちの姿が目につく素敵な実践であった。岐阜県の報告は、算数を特別支援学級の子供達にどう対応させていくかという興味深い報告であった。意見交流の時間は限られていたが、さまざまな県の様子を聞かせていただいて、勉強になり、刺激となった。よい時間であった。
- ・教科学習の様々なアイデアや、教師自身の指針の持ち方を知ることができよかった。
- ・他県の方と情報交換できる座席になっていて、有意義な話ができた。
- ・教科学習というテーマでの分科会であったので、特学での各教科での学習について詳しくお聞きできと思っていた。岐阜の先生の発表は、児童の実態も含めた発表だったので分かりやすかった。言語活用を取り入れるなど有効的な手立てが聞けたのでよかった。あと一つほど、岐阜市の教科を中心とした取組をもっと詳しくお聞きしたかった。さらにタブレットアプリ等の活用や教科を通した児童同士の交流活動等聞けるとうれしかった。
- ・研究主題について各県の先生方の意見を聞くことができてとてもよい機会になった。実践内容や生徒の実態に対する支援の仕方が具体的に分かった。

○今後の課題に関わるご意見

- ・話し合いの時間が短いのと、記録係や、進行の手伝いがあればよいと思う。
- ・時間が押したので、休憩時間を短くされてもよい。他県から来た教員は電車の時間もあるので、終わりの時間は五分以上伸びないと助かる。
- ・かなり広い範囲から1カ所(ひとつの県)に集まる大会なので、一部だけでもオンラインがあると、参加しやすくなると思う。
- ・夏休み期間だったため、資料のお知らせはもう少し早くいただけるとありがたかった。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目

アンケート結果（第3分科会：生活）

◎「第3分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・具体的な実践の発表を通して、実態把握の方法や丁寧な PDCA の取組を学ぶことができた。
- ・自分の好きなものを生かすことの大切さに気付かされた。
- ・発表の先生の実践だけではなく、交流でいろいろな先生方の実践が聞けたのがよかった。
- ・自立活動について、大切にしていくことを学べた。他県の情報交換はとても有益であった。
- ・県外を跨ぎ、特別支援教育についての熱い話ができ、大変有意義な時間となった。
- ・発表が素晴らしかった。参考にしたいことがたくさんあった。周りの方との交流も参考になることが多く、2学期からの実践に生かしたいと思った。
- ・自分が実践している自立活動を振り返りながら実践を聞いたり交流をしたりすることができた。夏休み明けからの自分の実践に生かしていきたい。
- ・研究討議では、決められたテーマで話し合うのではなく、現在の自分たちの実践や困っていることなどの交流ができ、他県や他市の様子を知ることができたり、さまざまな実践を知ることができたりと、学びとなった。
- ・日々の実践を私自身の教育につなげなくなる学びの会であった。必然性をもたせることや、指導と評価の一体化を実践することで子供の自立と成長を促すことができると思った。
- ・自立活動の視点から、子供たちの学ぶ必然性を考えながら、子供たちがやってみたい、これならできそうだという自覚をもった授業内容を考えて実践していきたい。
- ・授業を組み立てていくうえで、子供たちの得意なこと、好きなことをもとに活動を広げていくということの大切さを改めて学ぶことができた。学校に持ち帰り、分科会で学ばせていただいたことをふまえ授業をつくっていきたい。
- ・子供たちのめあてを明確にして意識させること、子供たちにとって必然性のある指導等、主体的な学びに向かう指導の在り方について学ぶことができた。
- ・少し長めの集団討議の時間があったが、色々な地域からの参加により、よい交流になった。普段なかなかがつつりと特別支援教育の内容で話ができないので、こういう時間は本当にありがたい。

○今後の課題に関わるご意見

- ・発表者として分科会の会場の下見、もしくは使える道具は確認の必要を感じた。ノートパソコンを使うことは伝えていたが、電源がとれない状態であった。また、事前に何があり、何がないのかが分からないため、準備が膨大になった。分科会のグループ討議はとても活発で、もっと時間がほしい気持ちになった。

第 47 回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目

アンケート結果(第4分科会:作業・進路)

◎「第4分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・特別支援学校の12年にも渡る子供の成長を知ることができ、系統的に目標を立て丁寧に支援・指導されていることが分かった。特別支援学級での作業学習の取組は、まず教師が楽しんでいることや個別最適な学び・協働的な学びにつながる適切な手立てをされていることが分かった。また、県外の方々と同じテーマで意見交換することができて大変意義深い時間であった。
- ・進路選択・キャリア発達について発表を拝聴したり、他県の先生と交流の機会を設けていただいたりするなど、大変有意義な会であった。
- ・キャリア発達について、小中高見通しをもって個に応じた指導支援をしていくことが大切だと思った。
- ・特別支援学校と特別支援学級では、できることに差があるかもしれないけれど、大元のキャリア教育や作業学習の組み立て方は同じだと思った。学校で年間計画から見直して、子供たちの自立に向けて活動していきたいと思った。
- ・キャリア教育について、年間計画を立てて活動しているのは、誰が担任になってもやりやすいことなのではないかと思った。
- ・事例発表では、生徒の自己選択や自己決定を上手に引き出す先生方の工夫が参考になった。これから学校での活動で参考にしたい。
- ・他県の作業学習・進路指導の取組について発表を聞き、意見情報交換をして、大変参考になった。勤務校でも共有をして生かしていきたい。
- ・特別支援学級での作業学習がとても充実していることが分かり、勉強になった。自分の知らない世界を広げられることができてよかった。

○今後の課題に関わるご意見

- ・機器操作のリハーサルをしておくとうい。受付入力しても座席表に反映されていなかった。閉会の会長あいさつの声が聞こえていなかった。
- ・席表が見づらく、ずれていた席もあった。グループ協議の少人数グループ分けにも関連していたので、見やすくしていただけると助かる。

第47回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目

アンケート結果（第5分科会：発達障害【小学校】）

◎「第5分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・手立てを通して、子供たちの姿がどのように変容したかがよく分った。子供の意見を尊重する姿勢を大切にし、日々の教育活動に努めていこうと思う。
- ・提案発表では、取り入れてみたくなる実践や教材が多数紹介された。また、討議の時間では、各県の通級指導の実態や様子を情報交換でき、大変有意義だった。
- ・子供たちの願いに合わせて支援を丁寧に考えるととても素敵な実践を聞くことができた。日頃の自分はどうかと反省の意味も込めて聞かせていただいた。また、特別支援のニーズが高まっている中、より通常学級の先生方にも特別支援について知ってもらうために、こちらからアクションを起こしていくことがとても大切になってくることを痛感した。
- ・通級指導について、また特別支援学級のことについてたくさん学ぶことができてよかった。現在は、通級担当のため、今回の実践を参考に一人一人の教育的ニーズに合わせた指導をより大切にしていきたい。
- ・個々のニーズをしっかりと把握して、解決のための手立て 教師自身の引き出しをたくさんもつことの大切さを学んだ。
- ・細かな実態把握と教師の関わりがすごく大切だと気付かされた。また、グループ交流で、各県の通級指導の実践や課題を話し合うことができ、職場の同僚に伝えたいと思った。
- ・通級の個別の単元指導計画の作成、素晴らしいと思った。ぜひ共有していただきたい。付けたい力とその指導計画を一覧化し、どんどんストックしていくとよい。
- ・個別の教育的ニーズに寄り添い、個の目標に向かって手立てをする実践を聞いて、2学期以降に自分のクラスの児童にもフィードバックしたいと思った。
- ・どちらの発表もきめ細やかなご指導だと思った。通級の指導では、実態に基づいて願う姿が明確で、それぞれの子供に応じて色々な指導方法があり、大変参考になった。古井小に行って研修したい。単元ごとの指導計画がきちんとあり、ゴールがはっきりしているので、子供にも指導者側にも大変わかりやすく、達成感も味わえると思う。
- ・すぐ使える内容で、素晴らしい学びであった。どちらの先生もむやみに叱らず、穏やかに必要な支援をしているのがすごいと思う。感想を書けない子にシールを使わせてあげるなんて、優しい心遣いだなと思った。ナイスの褒め言葉はすぐに実践したい。
- ・各県の通級体制の違いに一番興味をもった。やはり特学ほどではないにしても特性のあるグレーな子をしっかりと支援できる体制を整えることは大事であると感じた。
- ・初めて東陸大会に参加した。困り感のある子供が増える一方で人手が足りないという悩みが共通してあること、そのような実状がありながらも各学校でさまざまな工夫をしながら、頑張っている先生方がたくさんおられることを知ることができ、また頑張ろうと思えるような会であった。
- ・岐阜県の通級の体制をもっと知りたくなった。分科会で聞いた内容がとても勉強になった。岐阜県の通級の位置付けがしっかりされていること、通級担当の立場も守られていることを実感した。
- ・富山県の実践での振り返りの可視化がすごく参考になった。優しい声かけやナイス言葉を増やし、また可視化して子供たちに身に付けやすいようにしているところも素敵。美濃加茂市の通級指導での子供たちの願いを大切にした授業内容の精選も参考になった。

○今後の課題に関わるご意見

- ・グループ協議が大変有意義で盛り上がった一方、発言する時間がなかった方もいらっしやった。
- ・座席が分かりづらかった。
- ・資料の所在が中々分からなかった。（当日までに）準備ができなかった。
- ・会場が狭くて暑かった。

第47回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目
アンケート結果（第6分科会：発達障害【中学校】）

◎「第6分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・個別指導と小集団指導の連携が素晴らしい発表だった。
- ・通級について学びが深まった。また、他校の先生ともお話しできて、有意義であった。
- ・私の地区では原則、通級指導における集団の指導は認められていないので、色々とノウハウが学べたのではないかなと思う。
- ・小集団活動の実践を知ることができ、とても勉強になった。グループ交流では他の学校の先生から日頃の実践の話を伺えてとても勉強になった。
- ・通級指導でグループ指導をしている実践が分かった。なりたい自分になるためにはどうすればよいのか、そのために何をしていけばよいのか一緒に考え、実践していくことが大切だと分かった。
- ・通級の指導についていろいろな指導法や考え方を知ることができてよかった。通級に通う生徒が通常学級や社会に出てからも生かせる指導を目指すことが大切な事だと再確認することができた。
- ・子供がどうなりたいかを理解し、それに向けて指導していきたい。特に、振り返りやフィードバックをしていきたいと感じた。
- ・個別指導あつての集団指導の重要性を改めて実感した。児童自身が、肯定的に自己理解できるような指導を考えていきたい。
- ・通級に係る2つの小集団指導の報告のなかで、石川県の発表は、今後の通級指導の在り方を考える貴重な実践であった。子供の教育的ニーズに応えるため、各県が様々な取組をしていることに大いに刺激を受けた。特別支援教育の専門性の向上と持続可能な体制整備に向けて、自校の特別支援教育を検証したいと思った。
- ・実践の報告だけでなく、さまざまな方との意見交換することで、改めて、子供たちが主体的に取り組むことができるような環境設定や取組の仕方を学ぶことができた。
- ・個別指導を進めたうえで、次のステップとしての小集団指導は社会生活を見据えて非常に大切な取組と考える。今回の発表は大変参考になった。
- ・休憩を挟んだ後の、4人で交流する時間がとてもよかった。普段、他の学校の通級担当と日々の実践や悩みを交流することができないので、貴重な時間であった。
- ・草潤中学校のグループ通級の後実践から、生徒同士が課題を共有し、解決策を生み出していく姿が素晴らしいと感じた。進行や記録まで自分たちで行うことができていて、小学校と中学校の通級指導の違いを痛感した。素晴らしいご実践から多くを学ばせていただいた。

○今後の課題に関わるご意見

- ・できれば、岐阜の先生方とも分科会で話ができればよかったなと思う。
- ・共有の時間を、グループでの話合いにあてて、提案者へは、文書で伝えた方がよいように感じた。
- ・別室で拝見しましたがマイクの音が聞きづらかった。
- ・分科会、メイン会場でなかったせいか、質疑応答の音が聞き取りづらく、よく分からなかったのが残念。
- ・分科会の部屋が1つだとよかった。他県の先生と交流したかった。
- ・岐阜県内の職員にも資料配付があると助かった。もしも持参するべきであれば、そこを周知していただけるとよかった。

第47回東海北陸地区 特別支援教育研究大会 岐阜大会 2日目
アンケート結果（第7分科会：交流及び共同学習）

◎「第7分科会」に関わるご意見・ご感想

- ・MIM についての実践を聞き、通級指導にも取り入れてみたいと感じた。
- ・交流及び共同学習のねらいや、交流学級の先生方への特別支援児童への関わり方の理解を深める広めることの大切さを改めて感じた。
- ・貴重なご実践から新たな視点をを得ることができた。
- ・交流学級への考え方が深まる機会となった。これを機会に見直しよりよい指導へと工夫したい。
- ・お二人の先生方の貴重な実践について知ることができ、大変勉強になった。仲間との交流のための準備は、物理的なものだけでなく、心の部分が大切だと感じた。
- ・お二方の発表により、医療的ケア・交流・MIM 等、多くの視点から共同学習について考えることができ、助言者のお話もとても参考になるものであった。
- ・MIM を学校全体で有効に使う事例を知ることができてよかった。交流会では、様々な立場の違いはあったが、苦労や工夫が聞けてよかった。
- ・子供の実態を確かに捉えながら、豊かに人との関わりを育むことをねらいとした取組の提案から、多くの学びがあった。他県の方々と話をする中で新たな視点に気付かされ、大変よい機会となった。指導助言者の話からも多くを振り返り学ぶことができて大変よかった。
- ・他県の方と意見交流ができるような座席配置にいただき、ありがたかった。提案者のお二人の教育に対する熱い想いに触れ、自分自身もまた、学校に戻ったら頑張ろうと思った。交流及び共同学習については、双方に学びのある交流をすることがとても難しいと感じているところである。グループ討議では、他県の居住地校交流の事前の打ち合わせのもち方についてお話を聞くことができ、自分のこれまでの実践は足りないところが多くあり、改善していきたいと感じた。
- ・7分科会では医ケアの話が分科会で話題になった。自分は医ケアの子に関わってはいないけど、だからこそ知っておいた方がよい話だった。とても勉強になった。参加してよかった。
- ・仕方ないことではあるが自分がうけもつ生徒の課題と少し離れていたため自分事として考えるのが難しかった。交流学級の担任ともっと連携しようと思ったが、具体的にどのように連携したらいいか分からなかった。

○今後の課題に関わるご意見

- ・座席の表示が分かりにくかった。
- ・交流の時間がもう少しあるとよかった。
- ・グループ討議では、討議テーマが曖昧だったため幅広い意見がでた。討議を深めるために細かくテーマをしぼる、あるいはグループ討議をやらずに全体討議のみにした方がより深い話ができると思う。
- ・終了時刻は予定どおりになるように運営したい。県外の先生方が、帰りの電車を気にしている様子があった。グループ交流後の全グループ発表や助言者の話す時間など、何とかできたと感じた。



あとがきにかえて(特別支援教育研究 11 月号に寄稿)

7月 30・31日の2日間、本年度の東海北陸地区の研究大会を岐阜市にて開催いたしました。メインとなったじゅうろくプラザ及び他の2会場と、さらにオンラインでつないだサテライト会場とで、合わせて787名の方々にご参加いただきました。

本大会の主題は「多様な人々をつなぎ、幸せや豊かさを感じて生きる子供たちの育成～誰もが主体者として活躍できる場づくりと切れ目ない支援の充実～」でした。

1日目のオープニングでは、インドネシアの民族楽器「アングルン」を参加者全員で演奏する企画を立てました。「多様な人々をつなぎ」というテーマに沿った、国を超えた多様性です。「アングルン」は2本の竹の筒を組んだ楽器で、揺らして鳴らします。筒の長さによって音の高さが異なり、一人一音担当することで、自分の役割を果たしながら皆で演奏する楽しさを味わうことができます。

始めに、岐阜特別支援学校高等部の生徒がステージで演奏しました。その後、会場の参加者が一人一つずつアングルンを持ち、インドネシアからお越しいただいたアルディアン・スワルマン先生のご指導のもと、会場全体でアングルンの大合奏をしました。やわらかなアングルンの音色に包まれた会場に、「つながり」によって一体感が生まれました。共に企画していただいた岐阜大学教育学部特別支援教育講座の助教の鈴木祥隆様からは「同じ高さの音でも、一人一人揺らし方で音色や表情が異なる。その違いが合わさることで、音楽表現がより豊かになる。」という、インクルーシブ教育につながるお話もいただきました。

開会式に続き全体会として「岐阜県の特別支援教育の現状と課題」について、岐阜県教育委員会特別支援教育課 課長補佐兼係長の棚橋耕次様よりお話をいただきました。

講演会では、株式会社ヘラルボニー ウェルフェア事業部責任者の神紀子様より、「異彩を、放て。」というテーマでご講演いただきました。広い視野から「幸せや豊かさ」につながる社会の創造 DEI(ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン)について、ご参加の皆様と考えることができました。

神様のお話から、「普通じゃないことは可能性」「違いを面白い」「インクルーシブは、ミックスジュースではなくフルーツポンチ」など、示唆に富んださまざまな言葉をうかがうことができました。また、誰もがもっているアンコンシャス・バイアスに向き合う時間にもなりました。特別支援教育に携わる教員として、「誰もが主体者として活躍できる」指導・支援を続けるとともに、社会の一員として考えるべき視点をいただきました。

2日目は、「支援体制(地域・校内)」「教科学習」「生活」「作業・進路」「発達障害(小学校)」「発達障害(中学校)」「交流及び共同学習」という七つの分科会で、各分科会二つの県や市に発表していただきました。

どの会場でも、子供の姿が伝わる具体的な実践を通し、創造的・先進的な取組を紹介していただき、大いに学びや参考になったという感想が寄せられました。

本大会の運営では、コンパクト開催を目標としました。会場を駅周辺にし、受付・資料配布・座席表等のシステムをデジタル化することで経費や準備時間も削減しました。ご迷惑をおかけしたところもありましたが、ご参加の皆様が「つながり」合い、子供たちの幸せや、幸せな社会の実現のために一歩踏み出せる大会となったとしたらうれしく存じます。

講師や発表者、助言者をはじめ、本大会に携わっていただいたすべての皆様に感謝申し上げるとともに、次年度の静岡での大会に、バトンをつなげてまいります。

第47回 東海北陸地区特別支援教育研究大会 岐阜大会 大会報告

発行日 令和7年 11 月

発行者 岐阜大会 会長 中村 美雪

発行所 岐阜県特別支援教育研究部会(事務局:岐阜市立岐阜特別支援学校内)